

特70
379

『名士の偉人觀』

教育家！

名士の偉人觀

不屈生編著

明治の救世主福澤先生の十回忌に
際して故人を追想す

男 冊 後 藤 新 平

▲ア、實に夢の様である

ア、もう先生の十回忌にもなるかね、宛然夢のやうだ。吾輩が初めて先生に對面したのは明治十六年の事で、之も故人となつた長與專齋翁の宅で紹介されたのである。其頃吾輩は例の衛生局に勤めて居たので、長與翁とは別懇の間柄であつた。福澤翁と長與翁との交際は既に世人の知つて居る通りであるけれども、此時は只私

交上の面談に過ぎなかつたので、其後、明治二十三年に至り、吾輩は初めて公務を帯びて先生と會見したのである。

吾輩が改めて先生に對面したのは、明治二十三年の事で、それは北里博士の傳染病研究所設立に關する用談を帯びてゐつた。その後、吾輩は幾度か先生と親しく談論するの機會を得たが、其都度先生の偉大なる人格に觸れて、尊敬の念を深くするに至つた。今、先生の十週年に際して、茲に故人の面影を語る事は、私に吾輩の光榮とする所である。

▲先生は古今獨歩の學者である

福澤先生は非常に科學といふものを重視した。誰のいふ事でも、其人の頭から出た事で、それが西洋の思想、即ち科學と合つて居れば、必ずそれを用ゐた。先生は社會を此實質なる科學によつて導かうとした。其處で、此西洋の思想を幼稚なる日本の社會に普及させんが爲には、随分激しい、極端と思はれる議論もされた。一般

世人の想像した先生は、随分喧しい、狂熱的な人のやうでもあるが、實際面會して見ると、ナカ／＼温厚な篤實な君子人である。一個の立派な學者である、而も學者にして學者振らない處に、先生の特色があつた。

其頃世に學者といふ看板を掲げて居ながら、福澤先生の足許にも寄り付けない學者が多かつたのである。先生は常に平凡なる文字を以て、高尚なる學理を説く事に努めて居たので、世俗は實際に學者としての先生の蘊蓄を知り得なかつたやうであるが、先生の學問はナカ／＼世間普通の學者が三舍を避ける程のものであつた。但し或る専門の事物に就いて、何處までも深く究めて行くといふ風の學者ではなかつたが、兎に角其造詣の廣く深かつた事は、吾輩の常に驚歎措く能はざる所である。

斯くの如く福澤先生は一個の堂々たる學者であつたけれども、常に念頭から世俗といふものを離さなかつた。先生は何處までも學問の獨占といふ事に反對して、文明の恩澤を一般世俗の上にも行きわたらせやうとして努めたのである。是は非常な

る卓見といはなければならぬ。即ち、世間一般の學者は、動ともすると世俗の事を顧ないのを以て、得意とする風がある。けれども先生は決して世俗の事を忘れたなかつた。如何にもして學問の光、文明の恩澤を一般社會にまでも行きわたらせやうとして苦心したのである。此點が些か他の學者と選を異にして居るやうに思はれる。要するに先生は一面立派な學者であつたと共に、又一面大なる常識家であつた。學問と常識との調和、之が他に求めて得られざる先生の特色である。先生が學者にして學者に非ず、村夫子にして村夫子に非ざる所は、此邊に在つて存したのである。

▲先生の人格は理智と感情の調和

又福澤先生は理智と感情との圓滿に調和された人であつた。成程、先生は理智の人か、感情の人かと云へば、理智に傾いた人であつた。先生の一言一行は皆理智の鏡に照らされたものであつた。けれども、先生は決して理智一片の人でなかつた。先生はかの理智一片の人が動ともすると陥り易い無情冷酷の譏を被るやうな人では

なかつた。理智の下に温い感情が潜んで居た。心の奥には十分に血もあり、涙もあつた人である。處が、先生は何事かをやらうと決めて置きながら、屢々其豫定を變更した事があつた。之が爲、一部の人は意志の薄弱な人として誤解された傾きもある。然しながら吾輩を以て見ると、先生は決して意志の弱い人ではなかつた。或る點に於いては、立派な勇者としての資格を持つた人であつた。

然らば先生は何が故に屢々其豫定を變更したかといふに、之は先生が餘りに先が見え過ぎたからである。感情よりも理智が牙え過ぎて居たからである。其處で先生は種々に立場を變へて事物を観察した。従つて、先が見え過ぎたのである。決して意志の弱い人では無かつたのである。とはいへ、西洋文明の輸入、科學の普及といふ目的に就いては終始一貫して渝る所が無かつた。此一種の改革事業に對して先生は、實に鐵の如き堅固なる意志を抱いて居たのである。

▲先生の理解力と消化力

次に驚く可きは福澤先生の理解力である。苟もその話が合理的の事である以上、先生は、十のものを三つ迄いへば、直に全體を了解して仕舞つた。さうして、ドンク質問を試みる。その質問が、又何うしても全體を聞いてスツカリ了解して仕舞つた人でなくては出来ない質問である。兎に角、驚く可き理解力を持つて居た人である。それから稱す可きは、先生の消化力である。先生は斯くの如き鋭敏なる理解力をもつて、人の云ふ理窟を噛み分けたと同時に、それを消化して巧に自分のものとした。如何に理窟を咀嚼し得ても、それが他人のものとして存する以上何の役にも立たないが、先生は直にそれを消化して自分のものとした。さうして一段高尚な上品なものとした。

明治十六年の頃、社會に例の賣藥論がやかましかつた當時、吾輩は先生に會つて此問題に對する卑見を陳べた事がある。先生の賣藥論の社會に發表されたのは、其後の事である。吾輩は先生の消化力の大なるに驚いた。明治二十一年頃から、二十

五六年頃にかけて『時事新報』の紙上に掲載されて、世間の注意を惹いた先生の論說の中で、先生は吾輩の說にヒントを得たと思ふやうな説が大分あつた。而もそれが全然新しい説となつて飽くまでも先生の面目を發揮して居るのである。茲に於いてか吾輩は先生の消化力の偉大なるに驚かざるを得なかつた。

▲豫言者としての福澤先生

先生が早くも時代の趨勢を達観して、商工立國論を唱へたのは實に驚く可き卓見と言はなければならぬ。思ふに當時の社會にはまだ封建時代の感情があつて、學者文人を重んじ、商工業者を輕んずるといふ風があつた。而も此風潮に卒先して、日本の將來は商工業を以て立國の基礎としなければならぬといふ事を唱道したのは、實に驚く可き卓見である。其他國會開設論に於いて、通商貿易論に於いて、先生は常に一代の輿論に先んじて、社會の將來を豫言して居る。此點に於いて先生は實に日本新文明の先導者である。偉大なる豫言者である。然り而して、明治の無冠の救

世主である。

斯くの如く先生は凡そ社會の何事に對しても常に確乎たる卓見を抱いて居た。爾うして其將來を豫言した。けれども先生は實行家ではなかつた。自ら手を付けてそれをやる人では無かつた。寧ろ顧問の地位にあつて、人の相談に與る人であつた。實際先生は日本社會に於ける新文明の顧問役であつた。左なくして實行家たらんとするには、餘りに先が見え過ぎて居たのである。

先生の著作、先生の事業、する事なす事一々社會から非常な注意と非常な歡迎とを受けるので、世俗の一部には先生を目して商賣人であると卑下するものもあつたやうである。けれどもそれは賤劣なる俗人の偏見に過ぎない。言はゞ小人共が先生にケチを附けたのであつて、實際先生は立派な社會教育家であつた。今日、福澤先生を措いて他に、政府の厄介にならないうで、あれ程の事業を爲し得た人物が一人でもあるか、只森村市左衛門は比較的獨立の人であるが、他は皆いふに足らないので

ある。自分は政府の厄介にならないとか何とか立派な事をいふて居るが、實際はさうでない。其處へ行くと福澤先生は眞に立派な獨立自尊の人である。

▲門下生に先生を了解し得る者無し

先生の門下生は今や天下に瀰漫して、社會の最も健全なる中等階級の大部分を構成して居る。三田派の人達の聲言する所によれば、日本の新文明の十分の七は、福澤門下の秀才によつて建設されて居るといふ事である。併し、吾輩の見る所を以てしても、二分の一は確かに福澤先生の門下生であらうと思はれる。何れにしても其國家に致したる功績の偉大なる事は争ふ可からざる事實である。

孔子の弟子は一千人、其中、特に學藝に秀でたものが七十名、更に七十名の中に十哲と云ふものが最も人口に膾炙して居る。之に依つて觀ると支那の如き大國に於ては、孔子の如き聲名を以てしても弟子は僅かに千人に過ぎなかつた。而も福澤先生の門下に於いて、直接間接先生の薰陶を受けたものは少くとも三萬の多きに達し

て居る。此點からいふても先生の偉なる事は、誰しも認めざるを得ない處である。唯、三田の門下に餘り俊傑の出なかつた事は、先生の大きな不幸といはなければならぬ。殊に其薰陶を受けた門下が生前其先生を餘り好く云はなかつた傾のあるのは實に惜むべき事である。最も先生が死んだ後は、皆一齊に先生の徳を稱するやうになつたが、昔は随分先生から『馬鹿野郎』を喰つた連中が、陰で先生の事を、彼是といふたものである。要するに、彼等は眞に先生の價値を見出す事が出来なかつたのである。眞に其人格を咀嚼する事が出来なかつたのである。釋迦でも、孔子でも、あれが世界の聖人として持て囃されるやうになつたのは、其弟子に偉いものが多かつたからである。福澤先生が比較的に好い門弟を得なかつたのは、實に先生の生涯に於ける一大不幸といふ可きである。若し門下生に偉傑があつたならば、先生も今頃は孔孟以上の人物として認められて居るかも知れない。若しそれ慶應義塾の現在、及び將來に就いては、吾輩茲に餘り多くを云ふ事を欲

しないけれども、昔、先生が天下の大平民を以て、帝國大學に拮抗したやうな意氣は、此後とも到底之を慶應義塾に望む事が出来なからうと思はれる。

福澤先生の三大教訓

森村市左衛門

▲箸の上げ下げにも注意せよ

明治二十四五年の頃であつたと思ふ。予は元來商賣人であつた爲めに、何うかして慶應義塾に入つて學問がしたくて堪らなかつたけれども、何分にも商賣が忙しくて學校で勉強する事が出来なかつた。で一日福澤先生にお目にかゝつて、右の事情をお話した所が、先生の仰るのには、『ソレは尤な話である。自分はお前に同情する。併し乍ら志さへあれば學校に入らなくても學問は出来るから、そんなに失望するにも當らない』と懇々と慰められて、下の如き教訓を與へて下さつた。第一世の中

に處して行くのには、事々物々に就て注意しなくてはならぬ。些細な事であつても、呆然して居てはならぬ。朝晩の箸の上げ下げにも注意を拂ふと云ふ位で居れば、間違を生ぜぬのみならず益々人間も向上して行くものだ。とのお話であつたが、余は之を能く記憶して服膺して來た爲めに大なる利益を得て居る、『事々物々に就て注意せよ』言簡にして何でも無い事の様であるが、之を推し擴めて考ふると誠に宏大なもので、假令は予等が事業を起す上に就ても何れだけ、過を少くし利益を得たか計られぬ。戦後の事業熱に浮かされて種々の泡沫會社が出来たのであるが、其際及び今日でも、利益に爲るから發起人になつて呉れの創立員の中に入つて呉れのと、随分うるさく言はれるのであるが、予は何時もオインレと容易に承諾する事は無い。即ち此處が先生の訓言であると、先づ考へる事として居る。又外國に支店を設け、商賣を擴げるにしても無暗には行らぬ、よく研究した上にも研究した上で之なら大丈夫、必らず將來發展するものだと思込みをつけて初めて着手する事にして居る。

一寸した事の様であるが忘れられぬ言葉である。

▲一度悪い事をしたら一度地獄に行く

先生は品行に就て頗る嚴格なる意見を持つて居られた。或時、先生に、學生などが酒を飲んだ結果、フト友人に誘はれて遊廓に遊びに行き、後から悪いと感付いて有禮に自白して終つたら、之を容すべきものでしやうかと、お尋ねした所が、先生は、許るさないと仰やつた。で予は、佛教では懺悔すれば罪障消滅し、耶蘇の方でも悔ひ改めと云ふ事もあり、儒教では、過ては改むるに憚る事勿れなど云ふて、三聖人さへも過を許されて居るのに、先生は獨りお許るしにならぬかと、重ねてお尋ねした所が、矢張、許さぬと仰る。よく考へても見るがよい、事實が許さぬではないか、白いものに黒い墨汁が付いたとすれば、矢張墨汁が付いたではないか、徳川時代には罪人は黥を入れて居たのであるが、二度犯した者は二度、三度、四度と左右の腕や額に罪を重ぬるに従つて段々と黥の數を多くしたものだ、此黥は即

ち罪を表はしたもので生れ變らぬ以上は一生取れるものではないと、何としてもお許るしにならなかつたのであるが、よく之を翫味すると誠に意味深い事であつて、予は三聖人以上の教訓であると思ふのである。大抵な人が、耶穌、佛、孔子さへ許すと言はれて居るから、自分も許すと言ふのが普通であるのに、福澤先生の考は左様でない、一度悪い事をしたら必らず一度は地獄に落ちる者だと説かれた。之は全く意志鞏固でなくてはならぬと云ふ事と、自尊心とを奮起せしめる金言で、社會に對して最も偉大なる教訓であると思ふ。

▲役人などと結託して商賣するな

何でも獨立自尊を入笠しく唱へられたのであるが、是は予も屢々先生から聽かされた所で、予が其説明を聞いた概略を申せば、兎に角、人が世に立つには何うしても獨立で他人の世話にならぬ覺悟でなくてはならぬ。個人が獨立して初めて國が獨立するのである。一身上の事は必らず自身に處置しなくてはならぬ。商賣するの

も官途に就くのものにも、人に縋つて世話して貰ふやうでは駄目である。金の必要があつて借るにも、返す目的もなくしてするのは非常な間違で大なる禍の基となるのである。だから、お前が商賣するのでも、何處まで獨立自尊で行り通せ、よく其筋の役人など、結託して商賣するものが有るが其等は盲く行けば手つ取り早く樂に金儲が出来やうけれども、風呂敷一枚で荷物を背負つて歩いて、他くまで自分自身の力でやつて行く方が、他人の厄介になつてするのよりも、何れだけ愉快であるか知れぬと常に申された。予は實に先生の教訓に依つて今日までやつて來たものである。

終生忘る能はざる恩師福澤先生の訓誡

井上角五郎

▲煙草の吹煙をも見遊さゞりし先生の注意

先生は實際偉い人であつた。先生は勿論大きい處にも能く氣が届いて居られたが

又如何なる微細な點にもチャンと氣を注がれた。偉人の精力と云ふものは、實際何處まで續くものかと思つた程である。例へば、鳥渡人が来て腰を掛けて煙草を喫ふ、そして其吹殻を棄てる、先生は其吹殻の棄て方にも、チャンと氣を注げて、「彼奴は何うもダメだ、煙草の吹殻を那麼捨てやうをする實に怪しからぬ奴だ。」と斯う云ふ風に凡てに氣の注ぐ人であつた。のみならず、先生は此の周到なる用意を以て、家を處理し、社會に處したのである。で、我々も先生の傍に居つた時分に、先生から云はれた事で、今に腦裏に沁み込んで、其事を懐ひ出すと、顯然として先生の面影の偲ばゝる事が尠くない。

▲雜巾掛より得たる偉大の教訓

私が先生のお宅に食客をして居た頃である——名目は子供に漢學を教ふると云ふのであつたが、其實食客である——女中の家に病人が出来たとかで、人手の減つた事がある。で掃除なども思ふやうにゆかぬ。そこで私は朝は暗くに起きて桶に水を

汲み、縁側から家の中を、毎朝雜巾掛をして女中の代理を勤めたことがある。先生も随分早起の人ではあつたが起きて食堂へ出て來らるゝ迄には、私が起きてから既に二時間も過ぎて居るから、其内にスツカリ拭掃除が済んで終ふ。で何時の間に誰がしたのかと餘程不思議に思はれたらしい。或朝の事であつた。少し後で掃除をして居ると、先生が例の如く煙草盆を下げて食堂に出て來れたが、「井上お前が拭掃除をするのか」と云はるゝ。「人手が尠いから手傳つて居ます」と云と「モウ拭掃除は廢したら宜い」と云はるゝ。併し關はずに雜巾掛をして居た。すると先生は「お前は偉い者だ。もう此念慮が一つあれば生涯何うしても世に立つて苦い事はない。此心掛一つであるぞ」と云つて、非常に稱讚され、それに附けて先生が斯う云ふ事を云はれた。『世には縁の下の力持と云ふ事がある。これは働いても其働きが人に見えぬと云ふ意味であらうが、人間は人の前ではかり働いて、それを見せた結果一時は用ゐられてもそれは決して永續きがしない。併し縁の下の力持は縱令働きは人に見ら

れずとも、生活に苦むやうなことはない。知られるを求めずして働き、それが自然
人に知られたら、必ず永続をする。お前は今雑巾掛をして呉れるが、誰れもお前に
雑巾掛をさせやうと云ふ人はない、宅の者は誰れでも見付ければ井上が雑巾掛をし
て居るから早く止させやうと云ふに違ひない。それを平氣でして、そして己れが起
きて来るまでには、何時でもチャンと濟して居る。此念慮を失はずに生涯押し切れ
ばお前は、處世に困る事は決してないと云つて、大變に悦んで訓誡された。それを
今から願ふと、明治十四五年、私の恰度二十一二頃であつたが、私は今に於て、益
々其の味の深いのを感じて居る。

▲亂暴に書いた手紙から得た偉大な教訓

私は其後朝鮮へ行つて歸つてからも東京に居る時には先生の宅に居つた。其時は
最う玄關番もせず、食事も先生と並んでやつて居つたのであるが、或日、先生が私に
手紙を書いて呉れと云つて、文案迄教へて呉れられた。で、其手紙を書いて出すと

先生は之を手にとつて上と下とを、チャンと折つて『此一行は、文字が上へ出て居
る、此一行は文字が下へ出て居る、此處は恁んなに下つて居て、此處は恁んなに上
つて居る』とて、上下の揃はぬ處を示して、此手紙は無効だと立腹された、此の時
には私も腹を立てた。けれども先生を相手に喧嘩も出来ないから、『それでは此の手
紙は廢しませう』と云つて庭へ棄て、仕舞つた。すると先生は態々庭へ下りて、其手
紙を拾ひ、『此の手紙は此儘封じてやつても宜い。けれども、今後は注意しなければ
いかぬ。』と云つて別に怒りもされなかつた。そして先生は又靜に云はれた『今日で
こそ手紙をかくのに手蹟の悪いのを厭ふけれども、昔の漢學者は、文字の巧拙には
餘り重きを置かなかつた。一體士君子が字を習ふのは、末技で、繪畫彫刻と同じで
あるが、併し一字一句を苟もしないと云ふ心掛けは、處世上、大切な事である。
それで手紙の文句はチャンと上下を揃へて書く、そして間違つた文字を消すにも、
亂暴な消し方をしてはいかぬ。美麗に消して、消す物は、消さなければいかぬ。凡

て世の中の事は斯程迄に注意せねば、遣り損ひの多いものである』と云つて懇々教へられた事がある。實物に當つて教へられただけに、今でも深くこの訓誡が私の脳裡に印されて居る。

▲先生の希望されたる伸縮自在の生活法

その頃のことである、先生の最も能く言はれたのは、『己れは三つの望みを持つて居る』と云ふ事であつた勿論諸望半分の話ではあつたが、能く是を聞かされたものである。其の一つは自分の貧富の度に應じて、生活の程度を伸縮したいと云ふことであつた。即ち『金持が辻車に乗つて歩くのは面白く無い。馬車に乗るべきものである。それと反對に借財をしてまでも、美麗な着物を被るのは面白く無い。貧乏ならば、貧乏だけに、収入が少なければ少ないだけにやれるだけの生計を立てる、収入が多ければ多いやうにする。多いものを故更に儉約することはない、何でも出来るだけやるが宜い。贅澤と云ふ言葉も、儉約と云ふ言葉も無い筈である。身分相應

の生活をする。そこで収入が多い時には、一時に生活を擴げ、収入が少なければ、直ぐ其生活の程度を縮める、畢竟、伸縮自在の生活をして見たい』と云ふのが先生の第一番の望みであつたのである。

▲先生は何故に自分で自分の葬式を出したいと云はれしか

今一つの望みと云ふのは、自分の思ふ通りの仕事をして呉れるやうな雇人を置いて見たい。どうも今の女中や書生は何分附けた仕事の外にはして呉れぬ。モウ一つの望みと云ふのは、自分の死んだ跡始末を自分でしたい。自分の葬式を自分で出す、葬式係も自分でする。是れが己れの三つの望みだと云つて居られた。けれども夫れは到底出来ない相談である。此出来ない事を什麼して先生が望まれたか——諸望半分とは云へ——と云ふと、要點は、伸縮自在の生活をしたと云ふにあつたので之が頗る六ヶしいものだから、後の二箇條を附け加へて、其の六ヶしさ加減を示されたのである。先生が身分相當の事をしないと云ふことを嫌はれた事は非常な

のであつた。併し實の所生活の程度を伸縮すると云ふ事は、鳥渡出來さうで却々難い事である。昨日までは二百圓の俸給を貰つて居たから、抱車夫も置けば、女中も幾人も置き、書生も置いたが、月五十圓で暮すとして、抱車夫も下女も減じ、生活の程度を爰に縮めることは、今の人の出來ない處である。相當に金が出来ても思ひ切つて立派な生活が出来ず、只吝嗇れてその金を上手に使へないのが普通である。先生はそこが嫌でいつもこれを云はれたので、私はこれを終生忘れぬ誠として居る。

世人の學ぶ可き福澤先生の文勇

慶應義塾長 鎌田榮吉

▲輿論に反對したる先生の主張

故福澤先生は極めて常識に富んだ圓滿の人であつたとは云ふ迄もないが又一面には非常に勇氣に富んだ人であつた。先生の議論は何時も輿論と反對して居るが爲め

に色々の非難攻撃を受けた。併し先生は超然として紛々たる毀譽褒貶には頓着せず其卓越したる思想を以て國民を指導啓發するに努めた。即ち攘夷論の八釜しかつた時には開港論を稱へ、其後王政復古となり、國學者と云ふ様な者の舊い思想が勢力を占めて來た時には、先生は新しい西洋の思想を鼓吹した。又維新の初めには所謂政府萬能で、仕官をしなければ如何なる事も行へない。官憲と官任が一番エライと思つて居る時には、先生は之を攻撃して、何でも人は民間に居つて事をしなければならぬ。役人などは男子の爲すべき事でないとい論じた。而して獨立思想の發達を圖つた。是れと同時に又民權論を主張した。それから民權論が勃興して來たら、今度は先生は國權論を唱へ出した。其時には民權論と云ふものは非常な勢力を持つて居たもので、此過激な民權論を抑へるには色々の危険もあつたが、先生は其様な事には頓着せず、飽く迄國權論を主張した。又先生は實業の發達に留意して、世間の人が政治に熱中して居る時に、拜金宗と云いはれても關はず、實業を發達させなけ

ればならぬ、實業を盛にして一身一國を富ませなければならぬと盛に實業論を稱へた。

▲進む勇氣と止まる勇氣

此の如くに福澤先生は常に一步進んだ思想を以て國を導くに努めた。而して世間の弊を矯める爲めに、他から如何なる誹謗を受けても顧みなかつた。民衆の嚮背に顧慮せず飽くまで所信を貫いたといふ非常に勇氣のある人であつた。愚圖々々して決せぬ様の事はない。善いと信すれば随分思切つたとをやる。いけないとなるとびたりと止めて仕舞ふ。言論を主張するにも事業を経営するにも、遣り出せばドンドン進んで行くが、モウ是れで次へ移る必要があると見ればビタと止めて以後は其事に就て何にも云はなかつた。是れは實に六ヶしい事で到底尋常一様の人では眞似の出来るものではない。進んで事を爲す人はある。止つて守る人はある。併し進むべき時に進み止るべき時に止る人は滅多にない。之を物に譬ふれば鞭と手綱の様なもの

のである。鞭は馬を進めるものである。手綱は馬を止めるものである。鞭を執つて馬を進める人はある。手綱を執つて馬を止める人はある。併し馬をよく進めよく止める人はない。否調馬師は之を能くする。併し調馬師は社會といふ馬に乗れない。社會といふ馬に乗つて手綱を執り鞭を揚げ、旨く之を進退する者は、故福澤先生の如き實にその人であつたと思ふ。先生は實に常人の及ばない智慧と判断と勇氣とを保持つて居つた。此邊が所謂常識の本統に發達してゐた所であらう。

▲文勇の本源は獨立自尊

先生は如の如く勇氣満々たる人であつた。併し斬り合といふ様な事は非常に怖がつたに違ひない。即ち先生の勇は所謂匹夫の勇ではない。又先生は戦に出しても弱かつたらうと思ふ。即ち先生の勇は武勇ではない。吾輩の所謂文勇である。一體勇と云へば直に武勇を聯想するが、勇は武勇と文勇の二つがある。素より武勇は必要である。今の世界は殆んど弱肉強食の世の中である。各國互に鉞を持つて

立ち、隙あらば乗じて呑噬しようとして居る。現に三十七八年には露國の壓迫に對して四十萬の同胞は渾身の勇を揮つて彼と戦つた。是れは國民的武勇である。一個人の武勇と云へば怯めず臆せず身命を擲つて戦ふにある。戦ふのみでなく例へば彼の船乗が荒浪を蹴つて船を乗り出すのも、鑛山に入つて危険な仕事をするのも、又未開の蕃地に踏み入つて探検するのも、皆是れ武勇である。併し武勇許りでは十分一身一國の獨立を保つて發展して行く譯には行かぬ。即ち文勇が大に必要である。文勇は、何時でも命を捨てる、死にさへすればよい。と云ふやうな事ではならぬ。或點に於ては成る丈け死なぬ。如何なる困難、如何なる迫害をも凌ぎ永く生命を保て己の目的を達せんとするもの、是れ即ち文勇である。吾輩は世の中の人を救ふものである。吾輩は國の文明を開くものであると云ふ自信を持ち、己の主張を貫く爲めには如何なる敵が來ても怖れない、誹謗も來れ、迫害も來れ、侮辱も來れ、生涯如何なる困難に遭うても更に屈せず、飽く迄主張を徹すもの、是れ即ち文勇である。

文勇は何人にも必要である。政治家としては、攻撃の矢面に立つて政治上の主義を貫くと云ふ文勇がなければならぬ。學者としては何處迄も自己の學說を維持し發見したる眞理を世の中に知らせると云ふ文勇がなければならぬ。實業家としては、如何なる困難をも凌いで事業を發展するといふ文勇が必要である。詰り武勇と文勇との二つがなければ國は進歩しない。日本は武勇に富んで居るとは人も許す所だが、さて文勇はとなると之を歐米に比して甚だ遜色がある。そこで國の發展から考へると足りないものを足す事は、餘れるものを其上に足す事よりも急務である。即ち我々は武勇を保存し、文勇を養ふに努めねばならぬ。福澤先生自身が文勇に富んでゐたとは、前に述べた通りだが先生は又人に向つて文勇の養成に努めた。而して此文勇は何處から生ずるか云ふと、即ち其本源は獨立自尊である。

福澤先生の處世主義と吾輩の處世主義

伯爵 大隈重信

▲凡人主義の勝利者

福澤先生に、處世主義と云ふ可きものが有つたか什麼か知らぬが、吾輩には處世主義と云ふ可きものがない。一體、處世上、主義と云ふものは、定められる理窟のものでない。夫れを世人が、處世主義とか何とか云ふのは、所謂講壇的のもので、テーブルの上から學生に講義をする時の事である。處が凡て世の中の事は、學校の講義のやうな趣向には顯はれて來ない。で、處世主義など云ふことは、講壇では云へるけれども、實社會には餘り必要のない事である。然るに、近頃何主義某主義と云ふやうに、種々の主義が流行するが、主義と云ふ事は、左様に無造作なものでない。

吾輩は、學者でもなければ天才でもない。頗る平凡な人間だ。凡人だ、多分、福澤先生も凡人であつたらうと思ふ。若し、先生が非凡人で、常に高く止つて澄まし切つて居られてあつたら、彼れだけの偉い人にはなれなかつたのである。で、強ひて申さば、福澤先生は、凡人主義の勝利者である。

▲凡人主義は實行主義

福澤先生と同一種類の學問をした人達の中で、非凡の主義を持つた人があるかも知れない。けれども、然う云ふ人は、凡て失敗である。成る程、非凡人主義の人達は、口が達者で、議論が好くて、處世の講義は巧まかつたかも知れないが、是は、福澤先生の口調を藉りて申せば、所謂空念佛で、實際出來ない事を云ふのだ。一體口の先は調法なもので、口の先では、豪傑にも聖人にも、孔子にも釋迦にもなれる。是れは今の人間の智慧が、昔の人間の智慧より餘程進んだのである。若し、今の人間の口先にかゝつたら、耶蘇孔子の如き古の大宗教家と雖ども、恐らく三舍を避け

るであらうと思ふ。併し是れは、口先や議論の話で、イザ實行となると今人は古人に及ばない。非凡人主義の役に立たない理由は是れである。一體、實行せず高尙な理窟を云つた所で、夫れが何になる。云ふて社會を攪亂するよりは、寧ろ云はずに、實行し易き事を實行した方がいゝではないか。

▲福澤先生の社會觀

福澤先生は、優れた才子で、人格も高かつたが、人間は、存外平凡なものであると云ふことを知つて居つた。恐らく、自分自らも平凡なることを知つて居つたであらう。是が根本になつて福澤先生の處世主義が成立つて居る。それで、福澤先生は飽くまでも實行し得る頗る平凡な事の外は、決して口にしなかつたものだ。であるから、熱いな學者達、若しくは道德家達は、福澤は不都合な奴だとか、社會の道德を破壊するとか、福澤の議論は淺薄だとか、所謂倫理、道德、處世主義と云ふやうなもの標準として頻りに攻撃したものだ。が、是等の連中は、坊主の説教を無上

に有り難がる方の連中で、坊主自身が、何が何やら意味を解せず説教してゐるのを自分も解らずに聴きながら、隨喜渴仰の涙を零すと云ふ手合だ。此の調子で行くと御經の文句は、梵音とか漢音とか、成るべく解らぬやうに誦んだ方が尤らしく聞えていゝ。けれども、社會の事は尤らしく聞える計りで、其の實話らぬ事では何の役にも立たない。こゝへ來ると福澤先生は誠に偉い。言語にも行動にも、何處に一つ表裏がない。

▲福澤先生の日常生活

彼の醫師辯護士などの住居を見ると、玄關は立派、應接室には美しい書籍——而かも要りもせぬの——を飾つておどかすにも拘はらず、勝手元は何やら怪しげなのが多いやうだが、福澤先生にはそんな事が微塵もない、座敷へ通つて見ると、花が活けてある、お嬢さんが踊を踊つて居る、三味線を弾いて居る。先生は平氣で、煙草を吸ひながら、面白さうに見たり聞たりして居る。奥さんも傍に聞いて居る。親

威が来ても一緒に聞かうぢやないかと云ふ風である。宛然俗人の家で、學者の生活としては實に平凡極まるものである。加之、訪問客には、坊主も居れば神主も居る。俗人も山師も新聞記者も、種々雑多なものが来て居る。先生閑があると、煙草盆を下げて出て、誰にでも會つて話をする。氣に喰はぬから門前拂ひを喰すとか、佛頂面をして話すとか云ふことが更らにない。誠にハヤ平凡なものだが、是も先生の凡人主義から来て居るので、先生の眼から見れば、君子も小人も、學者も俗人もない。凡てが凡人で、彼も凡人吾も凡人であるから、凡人同士の集合に、誰彼の差別のある可き筈がない。こゝが、間口も奥行も一切平等なる、福澤先生の純凡人主義の極致で、吾輩の大いに敬服する所である。

▲吾輩の凡人主義

こゝで聊か、吾輩自身を紹介するが、無主義であると云ふ吾輩も、強ひて名づければ、矢張所謂凡人主義で、最初の傾向からして、福澤先生と同一徑路を辿つて居

るやうに思ふ。尤も吾輩は、小僧時代から政治運動が好きで、多く其方に身を入れて居つたから、書籍を読むことにかけては、福澤先生程勉強はしなかつた。又、讀んでも先生程の學者にはなれなかつたかも知れない。けれども、福澤先生が書籍から得た修養を、吾輩は政治運動中に遭遇した有らゆる困難の中から得て、窮極凡人主義に到達したのである。然し吾輩とても、更らに書籍を讀まぬのではない。福澤先生の讀んだ種類の書籍は、矢張吾輩の讀んだのと同いで、初めは、醫者を師として蘭學の書を繙いた。其の次は物理書である。所謂、當時にあつては最文明思想の根源であつた洋學書は、先生も吾輩も御同様に讀んだのである。——尤も吾輩の讀んだ分量は先生のより少くはあつたが——既に最初の傾向が同一で、同一種類の書を読んだのであるから、先生と吾輩との思想が、相近づいて來たのは當然である。即ち、先生と吾輩とは、期せずして凡人主義の流を汲んだのである。只、先生は教育者として凡人主義を社會に鼓吹し、吾輩は政治家として此の主義を社會に展べん

と欲したといふ差があるのみで、非凡主義なる封建思想を破壊し、凡人主義の文明思想を國民に與へんと盡力したのは同一である。

▲福澤先生との初對面

福澤先生と吾輩とは、生れ落ちると物堅い武士的教育を受け性質も聊か似通つて居れば、讀んだ書籍も右の通り、而して目的とする處も文明思想の注入で、大觀すれば一心兩體と云つてもよいが、明治六年迄は、トント先生に會つた事がなかつた。會つた事がなかつたのみならず、云はゞ喰はず嫌ひで、氣に喰はぬ奴だ、生意氣な事を云ふ奴だと、腹で思ふ計りでなく、口に出しても云つたものだ。向ふが太いことを云ふ、此方も太い事を云ふのだから、勢ひ衝突するに極まつて居る。其の頃吾輩は、偉い権力のある役人で、其の上書生氣風が抜けて居らぬから、剛太い事を云ふ。福澤諭吉も亦偉さうな事を云つて、役人などは詰らぬ人間のやうに云ふ。兩方で小癢に觸るので、一時は衝突して居つたものだ。處が、明治六年であつたと

思ふ。上野の天王寺邊の、薩摩人の宅で落ち逢ふことになつた。と云ふのは、先生と吾輩とは、以上の如く犬猿の間柄で、一方は、民間學者の暴れ者、一方は、役人の暴れ者、是れを噛み合して見たら面白からうと云ふので、云はゞ悪戯者どもが、芝居見物の格で吾々を引き合したものだ。夫れを知らずに吾輩が出掛ける。先生も亦知らずに出掛けて來たらしい。妙な人物が居ると思つたらうよ。其の時、吾輩は三十五六、先生は四十になるかならぬだ。是れは福澤だ、是れは大隈だと云ふので引き合はされて名乗りあつて、不思議な所で初對面が濟んだが、段々話し込んで見ると、元來傾向が同じであつたものだから犬猿どころか存外話が合ふので、喧嘩は廢さう、寧ろ一緒にやらうぢやないかと云ふ譯になつて、爾後大分心易くなつた。夫れから義塾の矢野文雄、故藤田茂吉、犬養毅、箕浦勝人、加藤政之助、森下岩楠など云ふ連中が、吾輩の宅に來る様になつて、到頭何時の間にか吾輩の乾兒になつて了つた様な譯だ。

▲先生と吾輩との交際

福澤先生も凡人主義、吾輩も凡人主義、而かも初め輕蔑し喧嘩したものが、意氣相投じて交際したのだから、其の交際たるや、愈深くなつて來た。夫れで、吾輩も先生を訪へば、先生も宅へ遊びに來る。先生が來れば、妻が酌をして酒を飲ませる吾輩が行けば、奥さんなりお嬢さんなりの酌で飲むといふ次第で、殆んど親族同士の懇意さになつて來た。

夫れで居て、兩人の社會に對して希望する所は同一事。俗界の役人なる吾輩が、法令訓令命令を以て國內を治め、政府の力で國を文明に導かうと云ふ趣向を凝らすと、先生は、教育の立場から巧利主義を鼓吹して、一生懸命に文明思想の注入に務める、學校の講壇でも、社會に發表する文筆の上にも又各所で行つた演説の上にも、シキリに着實にして根柢深き巧利主義を鼓吹したものだ。で、交れば交る程、先生の人格と學殖とに感心した。殊に先生は、吾輩より年齢も五つ六つ上であるし、するの

で、初めは同輩として交はつた吾輩も、漸々先生を先輩として尊敬するやうになつた。

▲吾輩の日常生活

夫れであるから、吾輩の日常生活も大分先生に近いものになつて居る。尤も、吾輩は子供が少いの、先生は子供が澤山あるのだから、親子團樂の樂みを、先生と同様にやる譯には行かないが、あつたら必ず同一だらうと思ふ。夫れに、先生は教育家で、何方かと云へばジミな商賣、吾輩は政治家で、本來派手な商賣であるから他人からの見た目は非常に違ふが其の行き方は、恐らく少しも違はない。先生が虚飾を排して玄關前も勝手元も同一様であれば、吾輩も亦其の通りだ。只先生のは凡てジミであるが、吾輩のは玄關前も勝手元も、打こ抜きの派手であるのだ。是は外面の差で、性質上の差ではない。彼の。表面儉約を裝うて其の實卑吝貪慾の行爲をなし人衆前では正直さうにして、隠れた所で惡事を働くなどは、吾輩も先生も、斷

じて取らぬ所の行動である。

▲當世流と吾輩の感想

處で、眼を翻して現代を觀ると、世の横着者どもが、社會に對しても個人に對しても、悪いと知りつゝ、云ひたい事を我慢して好い加減な事を云つて置いて、自分一人が好兒にならうとして居る。是が抑も當世流の處世法で其の方が世渡りには都合がよい。マア是が普通一般の處世法であらう。處が吾輩や福澤先生は、そんな辛抱強い陰險なことが出来なない。極く正直に、物に觸れて心持がよければ喜ぶ、悪ければ怒るのだ。で、善を善とし、惡を惡とする事に於ては、當世流の遠慮會釋が更らにない。此の邊は兩人實に酷似してると思ふ。斯やうに毒づくのであるから、時々世間の人達の御機嫌を損ふこともあるが、毒づいた當人に取つては心持のいゝ事夥しい。腹中の毒氣を吐き盡して了ふのであるから、身體上至極宜しいが、世人のためには至極宜しくないかも知れない。毒を吐かれて頭痛位はするであらう。

が、夫れも宜からう。先生も吾輩も、毒づく計りを能としない。時々世人に解毒劑も飲まして居つたものだ。此の意氣と此の無遠慮とがあつたから、先生は教育家として、明治の社會に文明思想を注入することに成功し、吾輩も亦、別途の方面から同様の貢獻をなし得たのである。要するに先生と吾輩とは、其の活動の方面こそ違へ、同一の趣向、相似たる境遇、近似せる主義を以て、社會に立つたのである。

▲福澤先生歿後の吾輩

▲福澤先生歿後の吾輩

以上説き來つた處で、福澤先生及び吾輩が、如何なる考を以て世に處したか、略分明であらうと思ふ。

已に先生は歿くなられたが、思へば先生は、行り方が行り方だけに頗る敵が多かつた——吾輩も亦敵が多い——が先生は夫れに對して口で云ふとか筆で書くと云ふ薄志弱行の徒ではなく、平地に波瀾を起すやうな事は大嫌ひであつた。誠に温順な平和な人で、交れば交る程友誼に厚い人であつた。が、如何なる壓迫を受けても

決して所信を曲げない。是が福澤先生の人格の高い所で、この人格を取り除けば、學者としては先生以上の學者がある、文章家としては勿論先生以上の文章家がある。只、口に云つて而して衆人に實行させ、己れも亦是を實行すると云ふ點に於ては、先生の右に出づる者がなかつた。否今でもない。先生の名の、久しうして賣れてるのも、此の爲めで、吾輩の先生を尊ぶ所以も此處である。夫れで何時の間にか、知らず識らず、口調さへ先生に似て来る。果ては、先生と吾輩とは一心同體にして社會に盡すべき約束がある如くにさへ感じたのだ。それに、今や先生が居られぬのであるから、二人の荷物を一人で背負ふが如き思ひで心私かに安からぬものがある。で、此の間交詢社（福澤先生の首唱になれる社交俱樂部）に行つた時『自分は今先生と二人前の仕事をしてるのだ。現に十分一人前の責任を盡して居るのに、この上一人前の仕事をするのは困る。お前さん達も跡から付いて来い。』と云つた位である。

福澤先生の常識と吾輩の常識

伯爵 大隈重信

▲學問中絶にかゝりたる不具者

常識と云ふものは、福澤先生の常識、大隈の常識と云ふやうに、人によりて違ふべき筈のものではない。只、常識を得た根源に至つては、人各々違つて居る。常識を極く平凡に説明すれば世の中に人間が處するに就て——福澤先生は是を處世と云つて居られたが、其の處世の上に就て——普通人間の爲すべきことを考へるのである。既に普通の人間として爲すべき事を考へるのであるから、社會に常識の必要であることは云ふ迄もない。處が、世の中には、随分理窟が解つて居るべき筈の人でありながら、社會に通用せぬことを行ふ人がある。萬卷の書を讀破し、古今東西の歴史、人情風俗などは、學問の上から立派に知つて居ながら、さて、現在社

會に行はれて居る普通の出來事に對しては、社會が右に行く事を左に行くやうな事を行つて居る人がある。社會の是とする所を此の人は非とする。是が即ち無常識で學問中毒にかゝつた不具者である。其處で、何程學問をしても、仕やうが悪ければ常識を得られないと云ふ事になる。

▲汽車旅行者の馬車馬的見解

一層常識を委しく云へば、自分の知つて居ることを社會事象の上に働かすに就て是を是とし、非を非とし、善を善とし、惡を惡とする。誰が見ても尤であれば、夫れが即ち常識で、極く平凡な話、別に文句を云ふ必要もなさうに見える。處が、前云ふ通り、理窟の分つた學者も間違ふ。社會の事象を譬へて見れば恰度旅行と云つたやうなもので、汽車で旅行をすれば平々坦々、誠に以て氣樂であるが、汽車のない所では、勿論汽車で行く譯には行かぬ。其の間には波瀾もある。曲折もある。其時には魔胡つく。さうすると、始終汽車で旅行をし慣れて、汽車以外に旅行をし

た事のない者は、そんな馬鹿な事があるものかと云ふ。是が即ち馬車馬的見解で、無常識である。其處で常識は、自分の狭い經驗ばかりでは得られないと云ふ事になる。

▲孟子の見たる常識

然らば常識は、學問からも經驗からも得られないものかと云ふに、決して然うでない。矢張常識は境遇と修養から得るのである。孟子が云つて居る『是非の心は人皆是有り、是非の心は智の端』即ち是非の心——常識——は智慧のハシクレたと云つて居る。で、常識を貯へるにも智慧を積まねばならぬ。智慧を積むには、境遇と修養の外致方がない。が、こゝで注意せねばならぬのは、徒らに専門的の智慧のみゴツゴツと頭に詰め込んでも、常識が出て來ないと云ふ事である。常識を蓄ふるには、積んだ知識を、社會の出來事に應用するに就て、判断を誤らないと云ふ風に修養せねばならぬ。

是には平生の心掛が肝要である。世の中の事は、複雑なうちにも順序があつて、相類似した者は、矢張り類似した原因を有し、類似した結果を取る。其處で、境遇上、修養上種々の出来事に遇つた時には、類似したものを総合分析して、一の脈絡を見つけて置き、新しい類似の事實に出遇つたら、是に向つて豫ての修養を應用する。然うすると、こゝに人間の常識が生れ出る。要するに常識と云ふものは、人間の総合分析の力で、境遇と修養とから得來るものである。

▲福澤先生の常識の根源

福澤先生の常識は、勿論修養から得たものも多いが、境遇から來たものも亦餘程多い。先生が、事物の大體に通ずるのは、天性にも依つたらうが、西洋の學問が、先生を開發した事は非常なものである。世の中が未だ西洋の學問を學ばなかつた時に、先生は餘程先立つて是を學んだ。學んで見れば通常の生活にシツクリ當て嵌る事ばかりで、舊來の天地に生活した者から見れば、正に、暗い所から、明るい所に出

た程に感ずる。面白くて堪らない。どうか是を多數の人間に教へて伶俐にして物知りにして、自分が文明を樂しむやうに樂ましてやりたいと考へた。處が、こゝが即ち、先生の先生たる所で、先生は、人より先きに西洋學を修め、當時の先覺者であつたにも拘はらず、物知りらしい利いた風な顔は更らにしない。高尚な、人に分らぬやうな理窟は更らに云はない。何でも、平易な、通俗な、俗耳に入り易き事に當つて、文明の眞理を人に教へたのである。語を換へて云へば、高遠な學理を常識の熔爐に投げ込んで、形を變へて多數の人に與へたのである。

▲學問を以て學問を滅ぼさんとせし先生の本願

處が、當時の學者とか物知りとか云はるゝ連中は、舊時代の、既に腐敗し去つた思想に囚はれて居たものだから、先生の新思想——と云ふよりも常識的見解——に反對して、矢鱈に先生を窘め立てる。恚うなつて來ると人間の意氣地と云ふものは妙な者で、反抗的勇氣が奮然として起つて來た。其處で先生の常識は、愈々大に愈

々確固たるものになつた。

で、先生の常識は、あらゆる事物に向つて發表されて居る。耶蘇でも、神官でも、坊主でも、乃至權兵衛でも、太郎兵衛でも、誰でも行へるやうな事を、廣く云つて聞かしたものである。手近い例が、彼の『福翁百話』を執つて一寸通讀したゞけでも解る。先生の常識には助かすべからざる確信があつた。其の證據には『我輩の多年唱道する所は文明の實學にして支那の虛文空論にあらず……和漢古今の學者に對しては勿論、孔孟の言と雖も通過を許さざる者なり。……古來の學說を根柢より顛覆して更らに文明學の門を開かんとする者なり、即ち學問を以て學問を滅さんとするの本願にして畢生の心事は唯こゝに在るのみ』と云つて居る。

▲碁なら定石擊劍なら型

夫れで居て先生は、七六ヶしい事は少しも云はぬ。世界の男女が平均して居るか、一夫一婦が世界の大道だと云ふ。貞女兩夫に見えずなど云ふ腐敗した道徳を保た

うとして、夫の死後私通混亂を來すよりは、夫が死んだら綺麗サツパリと諦めて、何等の遠慮もなく第二の夫を迎へ平和な家庭を樂しむのが人間の道だと云ふ。又、實業に入るものには學問が不必要だ、却つて貧乏する。夫れよりも小僧から叩き上げた方がよいとの説に對しては、從來の漢學なら死學だから駄目であるが、文明の學問は其んなものでない。尤も學問からスグ米は生れ出ぬが、碁ならは定石、擊劍ならば型である。是を心得て居て世に出ることの利害得失は云はでもの事である。云つて居る。其の他此の調子で其の見解が社會萬般の事に行き渡つて居る。で、福澤先生は、常識の大塊で、常識以外には楨杵でも動かかなかつた。夫れであるから平凡主義、平民主義、凡俗主義を立て通して、長らく人間を益したのである。

▲大亂の中に泰然として文明の學を講ず

彼の幕末の騷亂の時だにも、先生は、一たび幕府の粟を食んだ身を以てして、幕府をも助けなければ、勿論薩長をも助けぬ。忠とか義とかに雷同した者共が、先生

を殺すぞと壓迫しても平氣で居る。其んな内輪喧嘩の仲間には入らぬ。什麼でもない。己は國を文明にし、國民と共に文明を樂しめばいと云ふので、芝の新錢座に御輿を据ゑて、江戸市中が大混亂の真最中、泰然として文明の學を講じて居つた。斯く、百曲千折を経來り、先生は愈々益々常識の大塊として社會の表面に輝くとつた。

▲薬味筍から薬味を出すやうに勇氣を出した人

吾輩もまた、福澤先生とは、同じやうな性質で、且つ同じやうな書を読み、其の上同じやうな迫害的生活を経て居るから、常識の發達も矢張先生と同じやうである。只先生は教育家で吾輩は政治家であつた事と、先生は非常に偉らかつたのに吾輩が左程偉くないのとの差違がある。凡人を以て水平線とすれば、吾輩は、少し許り水平線から頭を出して居ると云ふ位のものだ。先生は嶄然頭角を抜いて居つた。マア甚だボンヤリした話だが、先生と吾輩の常識と云つたら以上のやうな者だ。處

で吾輩は自分で左程偉くないと思つて居るが、世の中には偉い人が澤山居るのに感服して居る。

此頃も或雑誌新聞などに、己れは憊う云ふ時勇氣を出したとか何とか云つて、薬味筍から薬味を出す様に、勇氣を出した話をした人のあつたのには實に驚いた。この調子で行くと今に常識教科書など云つて、一冊よめば凡ての常識を得らるゝなどと云ふ本も賣り捌かれぬとも限らない。實に、滑稽の至りである。

人をして感歎せしむる矢野次郎先生の 驚く可き熱心

北濱銀行頭取 岩下清周

▲初めて出來た商業講習所

どんな困難な仕事でも熱心に勤勉にやれば、恐らく出來ないと言ふ事はない。こんな理窟は誰でも知つて居る事で、別に耳新しい説でもないが、それを實行して居

る人はまことに少いのである。熱心と勤勉とが足りないために、中絶した事業も決して少くはない。吾輩は其度毎に、故矢野次郎先生の熱心と勤勉とを想ひ起さるを得ない。

時は明治七年頃、吾輩は築地の立教中學校に通つて居た。處が偶々丁度今の水交社のある處へ、立派な建築をした學校が出来た。何んの學校が出来た事かと思つて居ると、間もなく、商業講習所と云ふ看板が掲げられた。吾輩は目新しい此學校を見て、思はず、冷笑を禁じ得なかつたのである。

▲官尊民卑の思想から見た商業

と言ふのは、當時は未だ官尊民卑といふ思想が、一般の人の頭腦から全く脱けきらない時代であつた。吾輩は貧乏士族の家に生れた上に、性來人に負ける事が大嫌であつたから、非常に氣位ばかり高くなつて居た。さうして、同じく當時の思想を享けて居たから、官吏を非常に崇拜して、商人を此上もなく卑しいものゝ様に思つて

居た。だから、吾輩には商業講習所と言ふ看板が可笑しくて耐らない。商賣人などが、人並に學問をすると言ふ事が、如何にも生意氣な仕事のやうに思はれたのである。其處で、一體どんな事を教へるのかしらと思つて、からかい半分、規則書を貰ひに出懸けて見た。

▲受付の男は矢野次郎先生

處が行つて見ると、受付の所にハイカラな男が居る。吾輩が規則書を呉れと言つた所が「ナニ規則書が入るのかい」と莫迦にしたやうな物言ひ振りが、如何にも吾輩の癪に觸つた。其處で、何か缺點を探して攻撃してやらうと思つて、その規則書を見て居ると、東京のものは月謝が一圓、地方のものは一圓五十錢と言ふ一箇條があつた。こいつ、しめたと思つたから、其のハイカラ男を捉へて滔々と辯じ立ててやつた。一體何故こんな區別をつけたのだ、若し區別をつけるのなら、寧ろ地方のものは安くして東京のものを高くするのが當然ではないか、地方のものは、下宿料

をとられる上に種々の費用が入る。東京のものは、親の下に居るので爾うたいした費用もかゝらない。ソレを反對に、費用のかゝる地方のものから高い月謝をとり、費用のかゝらない東京のものから安い月謝をとるといふのは一體理窟が分らない、とやりこめた。處が、其男は落着き拂つて、「此學校は東京市で建てたのだから、市民の月謝が安いのだ」と、其理由を事こまかに説いて呉たのである。併し一旦吾輩も言ひ出したからには肯かない、猶も無茶苦茶に悪口を言つて、せめて先方の男を怒らしてやらうと思つた處が、いくら悪口を言つても、一向に怒らない。寧ろいよゝ落付いて来る。吾輩は變な奴だと思つたから「一體貴方は誰です」と訊いた見た。處が、「僕は辨理公使をして居た矢野次郎だ」と言はれて、吾輩も愕然としたのである。何故矢野次郎とも言はれる人が、立派な官職を罷めてしまつて、卑しい商人などを養成するのであらうと、吾輩は疑を起したのである。

▲馬車で吾輩を迎に来た。

併し、辨理公使の矢野次郎だと言はれて見ると、今更ら何んだか自分が悪口を言つた事が非常に恥しくなつたので、勿々吾輩は逃げ出さうとした、すると、矢野先生は「お前はなか／＼面白い男だ、乃公と一緒に家に來ないか」と言はれた。吾輩は何んだか氣まりが悪いので「今日は都合が悪いから」と断はつた。すると、明日は如何、明後日は如何と言はれた、いづれも都合が悪いからと言つたところが、「別にたいした用事もあるまいが」と先生は笑つて居た。全く別に用事がある譯ではなかつたが、ナンダカ氣恥しくなつたので、そのまゝ其處を逃げるやうにして出て來たのである。

處が、其翌日、吾輩が學校へ行つて居ると、突然、小使が飛んで來て、「貴君に會いたいといつて立派な馬車に乗つた人が來ました」と言ふので、誰れだと思つて出て見ると、それが昨日喧嘩をした矢野先生であつた。先生は嫣然として「どうだ乃公と一緒にこの馬車に乗つて行かないか」と言はれた、吾輩は恥しいやうな、嬉し

いやうな、又何んだか恐しいやうな氣がして、夢我夢中で馬車に乗つてしまつた。

▲實業家となりし動機

その馬車で、矢野先生は吾輩を陸奥伯と伊藤公の處へ連れて行つて紹介して呉れた。爾うして、これからの日本は、是非商業を盛んにして行かなくてはならない、さうするには、どうしても、商人を養成するのが目下の急務である、と言ふやうな事を頻に説いたのである。伊藤公も陸奥伯も共々大に賛成した。傍で聞いて居た吾輩は、少からず驚いたのである。平常から吾輩の卑しんで居た商人といふものが、それ程國家にとつて大切なものであるかしらと、今更らのやうに、吾輩の官尊民卑の思想は動搖して來たのである。其歸途、矢野先生は馬車の中で、商業の必要なる理由を懇に説かれたので、斷然、商業に志して吾輩は高等商業學校に入つたといふ次第である。矢野先生が、伊藤公や陸奥伯の口を藉りて、商業の必要なる所以を説かせたのは、實に先生が後進を誘導する用意の周到と、熱心なる意氣とを見る可

きではないか。吾輩が今日實業界の驥尾に附してやつて居る事の出来るのは、皆これ矢野先生の賜物である。

諸君は此事實に依て、矢野先生が仕事に對して如何に熱心で、如何に勤勉であつたかを知る事が出来るやう。當時、未だ漸く十八歳の一書生を、如何に矢野先生が見る所があつたとは言へ、かほどまでにもして、自分の思想を後進に注入しやうと云ふ、其熱心と勤勉とは驚かざるを得まい。吾輩は社會の事業が、只、熱心と勤勉の力が足りない爲めに挫けてしまふのを見る毎に、いつも矢野先生を思ひ出すのである。爾うして、先生のやうに熱心に勤勉にやれば、如何なる仕事でも出来ない事はないと思ふのである。

余が矢野次郎先生より受けたる忘れ難き教訓感化

芝浦製作所取締役

大田 黒重五郎

▲先生は口にて教へる人に非らず

考へれば夢のやうである。矢野先生の亡くなられたのはツイ昨日今日と思ひの外もう四五年となつた。十八九の頃から幾十年の久しい間、或る時は父として、ある時は師として、ある時は又た親しい友として、常に私を教誨し、誘導して下さつたことを、先生歿後の今日に憶見ると、私は謂ひ知れぬ可懐しさと悲しさとを覺えるのである。先生には随分長い間お世話になつた。先生は實に私の恩人である。そして私の生涯を通じて最も忘れ難き人の一人である。然しどのやうな教訓が私を益したかと云ふことになるそれは分らぬ。何しろ常に接近し、常に教訓されて居たのであるから、云はれ當方も馴れつこになつて殊更に刺戟されることも尠ない。私が思ふに先生は口で教へる人に非ずして身を以て導く人である。先生の平生の行爲その者が、既に立派な教訓となるものである。

先生の一舉一動は實に私に取つて千言萬語の教訓に勝つたものであつた。私はそ

れに依て始終發奮され感化されて來た。殊に先生と初めて相見し瞬間に受けた深い印象は未だに私の忘れ得ぬところである。初一瞥の印象と云ふものは、その人に對する後々の總ての感情を支配すると云ふが、私が矢野先生に對する初對面の印象は「風變りな人!」と思つたのであつた。

▲何氣なしに先生に逢つた

私が十九年の年の事である。私の入つて居た東京外國語學校が、今年で卒業と云ふ間際に、突然廢校され私も已むなく學事を離れることゝなつた。同窓のある者は、帝國大學に行き、或者は高等商業に入る。私も遊んで居るでもないから何處へか行かうとは思ひ乍ら未だ定めては居なかつた。而して毎日何を爲るでもなく遊び暮らして居た。

その時、不圖した機會から、その頃の高等商業學校の校長たる矢野先生に逢ふことが出來た。それ迄は無論先生に逢つたこともなければ、名を聞いたこともない。

先生が果してどんな風な人かさへも知らなかつた。

處へある人が、矢野と云ふ人は、非常に後進を愛する面白い人であるから、學校へ入る入らぬは第二として、兎に角逢つて置くがよからうと云つて呉れた。

▲高等商業へ入つてはどうか

そこで一日、私は何気なしに高等商業の校長室に先生を訪ふた。戸扉を排して室に入ると、折しも隅の方の机に何やら切りに書き物をして居られた。先生はやをら顔を上げ、あの凹んだ大きな眼で呢と私を見て、「こちらへお出〜」と心易げに手招きされる。傍近く進むと、先生は自分で傍の椅子を引寄せて、「こゝへお掛け〜」と恰も慈父が我が兒に對する様に親しげに云はれた。初めて逢つた人である、私は心中妙な人と思つた。當時は私も何しろ二十前後の生意氣盛り、大言壯語して自ら快として居た頃である。況して外國語學校出と云へば相當の學問もあり、自分では一廉の人間の積りで居たのだから、随分大膽に無遠慮に先生を捉まへて話した

ものであらう、彼是れ二三時間も口角泡を飛ばして饒舌つた擧句先生はニツコリされて、「君は一體何になる積りか」と聞かれた。

「何になるかと云つて人と生れて社會に關係を持つて居るからには何か社會に對して偉功を建てたい」と云ふと、「ウンソウカそれでは高等商業へ入つて見てはどうか」との話である。

▲先生膝を打つて『是は妙なり』と云はれた

その時まで私の頭には商業學校へ入らうの怎うしやうのと云ふ考へは更に無かつた。寧ろ外國語學校まで修めた人間が今更簿記や算盤や商法の修業等は馬鹿々々しい位に見くびつて居つた。處が先生はだしぬけに試験はいつ幾日にやるとまで云ふのである、そこで私は云つた。

「先生、試験なんか受ける必要は無じやありませんか、今私が饒舌つた丈で、私かどれ位の人間であるかと云ふ事は分つた筈です！」今考へて見れば随分亂暴な

話である。然るに先生は不思議にも礎と膝を打つて「それは妙だ」と云はれた。その頃の私は、實に腕白な仕様の無い、持て餘し者であつた。假初にも外國語學校出たる吾輩に對して商業學校へ入れとは甚だ以て人を軽く見た話である。露骨に云へば私の氣質としては頭から厭な事ですと云つて遣りたかつたのだ。這麼意氣込だから自然言葉が粗暴になる。で若し之が先生で無かつたら初對面に亂暴な事を云ふ書生である、迎も學校に入れる資格は無いと思つたかも知れない、それを先生は只「それは妙だ」と微笑されたのみであつた。此點に於て先生は確に人を御する法を心得て居られる人だと私は思つた。

▲試験の問題は薩張り分らぬ

こんな風で私は極無雑作に高等商業へ入つた。入りはしたけれ共、商業に興味を持たない私であるから、教科書等は手に取るで無し、毎日ぶら／＼暢氣に遊んで居つた。さうして二箇月程経つと、いよいよ試験に出遭した。語學とか數學とかなら

ば別に困りもしないが、一番閉口なのは簿記である。簿記の簿の字も知らない。是より前矢野先生からも簿記をよく覚えるやうにとの注意があつた。その爲め加納貞之助と云ふ人の書いた「簿記學原理」と云ふ書まで貸して呉れた。然し私は更に讀みもしない。いよいよ試験になりサテ出た問題を見ると何が何やら薩張り判らぬ。資産負債とは何ぞや、未決算勘定とは何ぞやなど云ふ色々の問題があつたけれども一として判らない、判らないけれども私は平氣だ。資産とは權利に屬し、負債とは義務に屬するもの、未決算勘定とは未だ計算の濟まない勘定なりと到つて無雑作にやつて退けた。

▲この一語で先生の尋常人でない事が分つた

出鱈目な事を平氣で書いて出したものゝ、有繋に氣にかゝらぬでも無いので二三日して何氣なく矢野先生にこの事を話すと「ツム帳面附けなど君等には晝寝して居ても出来ることだ」と諧謔一番して少しも他を云はれなかつた。

これには流石の私も實に感服して仕舞つた。矢野先生の尋常人でない事をこの時ツクツク思つた。あれ程以前から注意されてゐた事で、本までワザ／＼貸して呉れたのを、私が勝手に怠けて居たのであるから 本来なら「それ見た事か」位云はれるのが當然である。又、さう云はれては全く當方には一言の文句も無いのだ。然しここが先生の豪い處で、先生はチャンと私の氣性を知つて居らるゝから、この男には小言を云つても駄目だ、小言を言へば却て反抗心を起して何にもならない。と思はれたのであらう。だから小言らしいことは腰にも出されなかつた。この二つが當初矢野先生より受けた深い深い印象である。私は先生を思ふと共に、いつもこの二つの事實を思ひ浮べざるを得ない。

△情に激してはハヤ／＼と落涙さる

先生は實に鋭敏な、才を持つた人であつた。餘り「賢過ぎ」「切れ過ぎる」ので、世間からは輕薄才子の様に誤解されたこともあつた。

然し先生は決して世の吹けば飛ぶ様な輕薄才子ではなかつた。情に激しては時に風の如く疾驅されることもあるが、踏止まつたならば、牢として根城を築いて決して動せられなかつた。あの鶴のやうな瘦軀で、而も精力絶倫、一度自己の是と信じたことは飽くまで貫かずに置かぬと共に、いけないと思へば斷々乎として之を斥けた。その意氣は私共の最も感歎する處である。

先生は決して嘘を吐かない、と同時に人が嘘を吐くのを蛇蝎の如く忌み嫌はれた。曾て私が可い加減なことを云つたとき流石の先生も「さうあるべき筈では無いが」と云ふ意味で私を責められた。それで私は「あゝさうですか、先生あれは私が可い加減なことを云つたので、決して嘘を云つたのではないのです」と云ふと、「ウムサウカ」と云つた切りサラリと忘れた様な顔をして仕舞はれた。この淡白と云ふことは我々の最も學ぶべき點であらうと思ふ。怒る時には火の様に怒られても、時過ぎるとサラリと忘れたやうになつて、決していつまでも執拗に追及されないのは確か

に先生の美點と思ふ。

先生は非常な感情家で、時としては情の激した餘り、ハラハラと涙を流されることさへあつた。何事も眞面目に心から考へられるからであらう。

▲美しい情と、強い意志

然し先生は決して情一方の人ではなかつた。熱烈燃ゆるが如き情の裏には、透徹した、鐵の様に冷たい理性の力が配されて居た。先生の臨終數日前の事である。容態が甚だ面白くないので、吾等門下のものには始終附き切りで何かとお世話をしていた。今日明日と迫れる命の、先生の身になれば定めし心細いことであつたらうと、傍の見る目では思へるが先生の容子はいつもに變らぬ平然たるもので、相變らず國家社會の事、後進の事に就て何かと話された。死に臨むでなほこの大度量あるは確に先生が情一方の人でないことが分る。

殊にかう云ふことがある。先生の愛兒に英國へ留學して居るのがある。先生は非

常の子煩惱で、遠く手離してやつた子の事に就てはいつも氣に懸けて、殆ど郵船毎に手紙を遣つて何くれと慰め勵ますことに勉められた。子の方からも始終手紙を缺かさない。その父子の情の濃かなることは、實に羨ましい程であつた。それ程いつも念頭に懸けて居られる愛兒のことであるから、病氣の重つた折には、何かそれに就て話があるかと思つてゐたが、少しも口に出されなかつた。心では思つても居られたらう、一目會ひたいとか、何か云ひ置きたいとか遣る方ない思ひもあつたらうけれども、口には少しもそれを云はれなかつた。泰然自若、此一語は先生の臨終の状態を最も能く云ひ表はしたものである。

▲先生の夫人は賢婦であつた

家庭の人としての先生は又申分のないものであつた。元來先生の夫人は非常な賢夫人で、先生の影になり日向になり先生を助けられた内助の功は實に多かつた。それで先生も夫人ばかりは非常に尊敬して、「マイ、オールド、ウーマン」など、始終私に

云つて居られた。婦人に種々あり、曰く母婦、曰く師婦、曰く友婦、云々と、釋迦は云ふて居るが矢野夫人は實に先生の母の如く先生を勞はり愛された。又師の弟に對する如くこれを導き教へもされた。又友の如く厚く盡された。夫人は先生に對し母婦でもあり、師婦でもあり、友婦でもあつたのである。

先生があゝの通り多くの學生を愛され、又學生の方でも懐いて行つたと云ふのも一は正しく夫人の盜るゝ愛に浴することが出来たからであらうと思ふ。

琴瑟相和すと云ふ程美はしいことは無い、一家は國の基である。この家庭の圓滿であることは、他の何事よりも最も喜ぶべき事ではあるまいか、此點に於て先生の家庭は實に立派な、幸福なものであつた、これと云ふも畢竟先生、夫人が共に相愛し、相敬して居られたからであらうと思ふ。

△その愛は馬にまで及ぶ

先生の我々後進に親切であつたと云ふことは、今更述べるまでもなく既に世に知

れ渡つてゐることであるが、先生の親切心は常に書生とか、親近のものに對するのみではなく犬猫馬の如き動物にも常にこの親切を以て對された。先生は書生の周旋などで始終忙がしく馬車で駆け廻つて居られたが、どの様な時でも馬に鞭を當てられると云ふ事は無かつた。馬車が坂にかゝると、すぐ馬車を下りて、自分で馬の轡を取り、背を撫して之を勞はられた。思ふに馬でも坂は苦しからう、晏然として馬のみを苦しめるに忍びないと云ふ優しい先生の心であつたらう。

この點は確かに今の世の自己一方の人を誠むるに足る教訓であると思ふ。私が考へるに自愛と他愛は正しくコンビネートされるものである。他を愛するは應て自らを愛する所以なのである。矢野先生も常にかう云ふ意見であつた。

△大八車と天保鏡

先生は又曖昧な事、不條理な事を非常に嫌はれた、譯の分らぬ事を云ふ奴は頭から刎ね付けて取合はれなかつた。

先生が麻布の家を買はれる時、その金を小切手か何かで拂はうとした。すると先方の賣主は「現金で頂戴したい」と云ふのである。「譯の分らぬ人間だ、小切手と現金とどれだけ相違があるのか、今の世の中で小切手程便利なものはないのだ、それを嫌つて、態々現金で呉れとは甚だ愚な話ではないか」と云はれても、どうしても聞かない、是非現金で呉れと云ふ。そこで先生憤然として、「可し、それでは現金でやらう何日何時に大八車を持つて第一銀行まで取りに來い、すつかり天保錢で拂つてやらうから」と云はれたので、流石に賣主も驚いて不承々に小切手を受取つて歸つたと云ふ話である。

▲一部の人に誤解されたる點は即ち先生の美點

その他逸話のやうなものを、求めたらいくらもあらう。然し要するに先生は情に厚い、意志の強い、潔白な正直な、親切心の深い人であつた。尤も先生が若い書生などに伍して、風も姿も構はず時に放歌高吟されるなどを見ては世人はその人格を疑

ひ、人物を是非するものもあるが、私を以て見ればそれは先生の天真の流露された處で、それがあつてこそ益々矢野先生の美を加へるものではあるまいかと思ふ。前にも言つた通り、先生は到底口を以て人を教へる人でなくて、行を以て人を化する人である。先生が生前の一言一行を思ふと其處には云ふべからざる教訓が含まれてゐる、多くの人は是に偉大なる感化を受けるのである。

終世忘れ難き矢野次郎先生の親切

萬歳生命保險會社
専務取締役 藤村義苗

▲沁々と感じた先生の親切

私が初めて矢野次郎先生にお目に懸つたのは、丁度私の入つて居た外國語學校が廢校になつて高等商業學校と合併した時、矢野先生が東京商法講習所から轉じて校長になられた時だ。最う四ヶ月程で卒業すると言ふ間際に、廢校になつたので、

私は四ヶ年半の修業證書を貰った。併し、當時は未だ露西亞語などは餘り必要がなかつたので修業證書こそ貰つたが、それを以て、直に職を得ると言ふ事は頗る困難であつた。そこで、私は爾後の方針に就いて矢野先生に相談したのだ。私が親しく矢野先生の温容に接したのは此時が初めてであつた。

先生は私の事情を細かに且つ熱心に聞きとられて、種々心配をして下さつたが、別に方法もない。そこで、先生は「單に露西亞語ばかりで世に立たうと言ふのは頗る困難だ。寧ろ進んで商業學校を卒業し、語學を應用したらば如何であらう」と言はれた。勿論私には、少しの異存もないのであるが、困つた事には私の家が頗る貧乏だ。外國語學校も官費でやつて居た位で、到底、學費を支給する事が出来ない。私は其旨を先生に話した。すると先生は「宜しい。さういふ事なら選抜試験の上優等生丈け官費にする事にしやう。」と言はれたので私も奮勵一番其選抜試験に應じて官費生となる事が出来た。其時、私は先生の親切を沁々感じたのであつた。

▲親も及ばぬ病兒の介抱

私が生涯忘れる事の出来ないのは、私の小兒が病氣の時に受けた先生の親切だ。當時、私は櫻組に居て陸海軍の御用を蒙つて居た。何んでも二月頃の事であらう。私の小兒が扁桃腺を病つて東京病院に入院した。處が診察の結果、どうしても切開しなくてはならないと言ふ事になつた。其翌日、私は櫻組の用務を帯びて青森へ出張しなければならぬので、施術後の経過を見て行く譯にはいかない。幸ひ、矢野先生と高木博士とは昵懇の間柄であると言ふ事を聞いたので、私は早速矢野先生を訪れた。

當時恰も先生は肺病で床に就いて居られた。病褥の先生を煩すのは如何にも忍びないが、他に頼む人もない。そこで、先生に事情を訴へてお頼みしたところが『よし』と極めて軽く受合はれた。私は、先生が餘り手輕に受合はれたので、心許なく思ひ乍らも青森へ出立した。

すると、間もなく先生から『タイムマシンデックス』と言ふ電報が来た。私はこの電報を受け取つて安心して居ると又も先生から『タイムマスキサメタ』と言ふ電報が届いた。私は此二通の電報を得て、今更ら乍ら先生の親切に感謝の涙を流したのだ。そのお蔭で、私の用事も滞りなく済んで上京すると私の小兒も大きに癒くなつて居た、家内の者にきくと、私の小兒が施術する日は、雪が大變酷く降つて居た。それにも拘らず、先生は病褥の身を外套に包んで、遠くその雪の中を病院まで出向かれ、施術の始から枕許に付き、つて、何かと指圖されたと言ふ事であつた。實に先生の親切には何物を以ても報ゆる事が出来ないのだ。

▲友人は敵にあらざれば味方也

先生には有力な味方も澤山あつたが、又、先生を嫌つて居るものも少くはなかつた。元來先生は其性癖として、全く自分の味方となる人か又は絶対に敵となると言ふ人でなくては交際を求めなかつた。併し、先生が正直で且つ親切であると言ふ事

は敵も味方も認めて居た。只、先生を嫌ふ者は餘り先生が親切すぎて、いろ／＼細かい事にまで世話を焼くからだ。それ丈け又先生の家には、絶えず職業の周旋を頼みに来る人が多かつた。先生は、それ等の人を一々引見して親切に心配もすれば、それ／＼方針も授けられた。私などは、先生が人の職業でいたく氣を痛められるので、餘りお構ひなさらない方がいゝと言ふと、いつも先生の機嫌を損じて叱られた。先生は決して人に依つて其親切を異にするのではない。先生の親切は全く一視同仁であつた。

先生が最も嫌ひなのは、嘘を吐く事だ。權謀術數を弄する人は蛇蝎の如く嫌はれた、私なども其感化を享けて、今日猶言を左右にする人とは一日も交際をして居る事が出来ない。實に先生の一言一行には學ぶべき事が多いのである。

矢野次郎先生は余の運命をいかに 指導せられたるか

日本皮革株式会社取締役

町田豊千代

▲単に先生では物足らず

私は、もと一橋(東京高等商業学校)に在つて、故矢野先生の薫陶に浴した一人であるが、先生を單に『先生』と呼ぶのは何となく物足らぬ心持がする。『親分』でもあるやうな、先輩でもあるやうな、而して、物の分つた父兄でもあるやうな、一種云ふ可からざる敬愛の念を禁ずる事が出来ない。

私が學校を卒業したのは明治二十三年余二十三歳の時であつたが、卒業と同時に斯う云ふ事を考へた。

『自分は貧乏士族の子で、貯蓄としては一文もない。此の場合怒じつか未來の立身と出せとか云ふ考を以て、食ふや食はずの會社員などになるのは面白くない。夫れよりは、若干でも給料の高い所に奉公して、幾何かの貯蓄を得た後、徐ろに將來の飛躍を試みやう』と。仍で、此の事を先生に相談すると、成る程悪い考へではない兎に角やつて見るがよからう。併し給料の高い所と云へば學校教師より外今の所口がない。是をやつて見る氣があるかとの事、素より私は給料さへ高ければ何でも構はなかつたのであるから、早速快諾して函館の商業學校に世話して貰つた。

▲そんな筈なら絶交だ

私が此の學校に教鞭を執つたのは、二十三歳から二十五歳迄足かけ三年の間であつた。其間非常な儉約をした甲斐があつて若干の貯蓄が出来た。恰度其頃、シカゴに萬國博覽會が開かれたので、私は米國に渡つて何か金儲けをしやうと云ふ考を起した。その時の貯蓄は旅費を支出して尙ほ若干の餘裕がある勘定であつた。

そこで、此の理由を以て學校を辭職し、地方の有力家からは分に過ぎた程の盛大

なる送別會を開いて貰つて、意氣天を衝くの概を以て一先づ東京に歸つて來た。私は此の壯舉(と其の時は思つて居た)が必ず先生の大成を得る事と信じて居つた。處が、相談して見ると案外である。先生は「渡米するに就ては、何か確かな目的があるか」と問はれる。私は「別に確かな目的はありません。只彼地に行つたら必ず何か金儲けがあるに相違ない。夫れを見附けてウンと金を儲けたいのです」と答へた。メルと先生は以ての外だと云ふ氣色。「そんなことで米國三界迄只行くと云ふ筈があるか。そんな筈棒なら今後絶交だ!」

先生は何時も這んな調子であつた。先づ巨砲を以て相手を驚かして置いて、それから漸々に細かい所を説明された。要するに先生の訓誡は、突飛な考は廢して會社にでも入れ、其の方が後來のためであると云つたのであつた。

▲先生より圖星を指さる

併し野心に充ちた私は、這んな事位で渡米を思ひ止まる事が出来なかつた。會社

なんぞに入つて、何程働いて見た所で知れたものです、そんな事では自分の力の何萬分の一も國家に貢獻する事が出来ない。砂を噛んでも米國で成功して、大いに國家の爲に盡したい。』

私が斯う楯を突くと。今度は先生の皮肉が益々手厳しくなつて來た。『お前は函館で駄法螺を吹いて有力家に送別會などを開いて貰つたさうだが、大方、有力家の手前目ないから、渡米を止められないなどと云ふケチな量見だらう。開んな事で何が出来たものか。此の矢野が見て居る前で其の人々に手紙を書け。實は飛んだ心得違をして、折角送別會迄開いて戴いたが、矢野に説破されて渡米を思ひ止まつた』と云つてやれ。お前が書けなければ己れが書いてやる』

斯う云はれて見ると、何だか圖星を指されたやうでムシヤクシヤして堪らなかつた。『そこで夫れぢや米國になんぞ行かなくともようござんす』と言下に答へた。

▲喧嘩調子で先生の家を辭す

スルと先生は疊みかけて、『夫れが分つたら奉公しろ。會社の口なら何程でもある』と云はれたが、私は頑として此の勧めに應じなかつた。『今の若さで他人の飯などを食ふのは、餘りに意氣地がない。开んな事は樂過て私には出來ません。兎に角三十歳になる迄は、是が非でも自分の思ふ通りに活動して、其のうちに大金を儲けたい。萬一失敗に終つた所で、野心を満した——自分の思ふ事をやつて見た——と云ふ満足を得れば夫れで澤山です。若し困つたら其時は又お世話になります——と私は斷乎として言ひ放つた。先生は尙ほ思ひ止まらせやうと思はれたのであらう。困つた時來るつて、一體お前は何程金を持つて居るか。』と問はれた。其時私は『金などはどうでも、私は腕でやり通す』と答へた。随分暴慢不遜の答ではあつたが當時の意氣として全く已むを得なかつたのである。

先生も是に於て豎子度す可からずと思はれたらしい。『然う云ふ事なら勝手にするが』と云ふ事で、絶交ともつかず絶交でないともつかず云はれ見棄てられたと

云ふ形で、私は先生の家を辭し去つた。

▲知人から浪人、野武士と嘲らる

私は直ちに、満身の野心を以て社會に突進し、最初秋田縣で山林下戻の運動を始めた。勿論私は之を以て大金儲をする積りであつた。所が、諸種の事情から、此の計畫も美事に失敗に歸した。けれども、燃ゆるが如き私の野心は、この失敗のため更に衰へなかつた。間もなく日清戦争が始まつたので、此の機乗す可しと、房州で錆の鋳造を製造して陸軍省に納めた。が、如何しても豫期の如き収益を得る事が出來なかつた。併し、聊かの利益はあつたので、其の利益を以て、山形縣下で石炭の採掘を試みた。けれども、是も二三ヶ月で到底物にならぬ事を發見した。其他種々の事業に手を出して見たけれども、結果は知人から、天下の浪人だの、野武士だのと、仇名をつけられた位に止り、何れも不成功に終つた。

▲五年間浮浪生活の大教訓

斯くして夢の如く五年間を経過し、失敗に失敗を重ねた結果、漸く『一攫千金』的思想の愚なるを覺り、自ら自己を嗤ふやうになつた。そこで、私が三十歳（是は先生に約束した年限である）の正月、五年振りで先生を訪れて斯う言つた。『兎に角五年間の無鐵砲な活動によつて、自分の野心だけは充たしました。是が私に對する實驗上の大教訓で、此の實驗を経て、始めて私は、先生の御言葉の眞なることを悟りました。今後は聊かも妙な野心を起さずに、如何なるケチな仕事でも眞面目にやる事が出来るやうになりました。』と私が云ふと、先生は昔日の事はサラリと忘れて、雙頬に會心の笑を満えて悦ばれた。

其場で、私は、女房を貰つて身を固めたい事、就ては家を持たねばならぬ事等を相談し、何れも先生の賛成を得て、奉公口を探して貰ふ事になつた。其年の四月、私は先生の世話で合資會社櫻組に入り、櫻組が株式會社と變り、他社と合併して日本皮革會社となつた。今でも其の重役となつて居る次第である。此の半生を通じて

善導扶掖された先生の事を想ふと、私は先生を單に『先生』と呼ぶのが物足らぬ心持がしてならない。

獨斷の人傑森有禮君の面影

文學博士 男爵 加藤 弘之

▲法制局時代と鳴鹿社時代

私が、森有禮君と初めて爾汝の交を以て相見ゆるに至つたのは、たしか明治二年のことであつたかと覺えて居る。當時政府に制度局といふものがあつて、現今の法制局といふやうな機關であつたが、その制度局に奉職して居た連中は、神田孝平、津田眞道、細川潤次郎などいふ顔觸で、森君も私も亦その中の一人であつた。森君は、薩摩藩から長らく洋行をさせられた人で、當時新人物のチャキ／＼であつたら、盛に新知識を振廻したものだ。六年に鳴鹿社が起り、福澤諭吉、西村茂樹、杉

亨二、阪谷素（今の男爵阪谷芳郎氏の嚴君にして儒者たりし人）その他の學者に、我々の法制局係連中が参加して、國家社會に貢獻しやうと努力したものだ。社名を採つて題號に冠した鳴鹿といふ雜誌は其の時に發刊したもので、是が我が國に於ける雜誌の嚆矢である。森君は、此社に於いても依然として出色の男子であつた。

▲森君の著しき獨斷癖

然らば森君の新知識は、到る處に儕輩を墮若たらしむる力量があつたかと云ふに爾うは往かぬ。いづれ一廉の頭腦の固まつた連中を向ふに立てば、生優しいことであつたと感歎させる譯には往かぬけれども、森君には特色があつた。異を立つるといふ性癖があつた。異を立つる、爾う云ふのは語弊も有らうが、森君はその性癖として、いかに困難な問題に逢着しても、間違つても他人の意見といふものを叩ぬ。打解けて相談を爲ぬ。斯うなら斯うと獨斷で定めて了ふ。而して一旦定めたら決して動かぬ。如何なる反對に出會しても一步も譲らなかつた。是は一面からは非常

に賞すべきことで、百人の識者の思案に餘る難事業でも、時に獨斷の遂行で仕上げることが出来る。然し又、一人一人の知識は大抵分量が極つて居るから、獨斷は何時もあるのだ。森君も是位の事は承知の筈、知つて尙且濶大の襟度を示すことの出来なかつたのは、畢竟君の個人性として自我の念が著しく旺盛であつたからだ。好んで異を立て、快とする、そんな子供らしい了簡はなかつたが、結果が異を立つると同様に現はれ、ズンと一調子異つた男子で、兎に角常鱗凡介でないとは當時から齊しく認められて居つた。

▲森君と大木喬任伯との對照

君が公使として、清國や米國へ赴任して居つた頃は、外交界の局面が平凡でもあつたらうが、素と日本といふ國家が一人前に認められて居らぬ時代であつたから、自然君の辣腕を振ふべき機會とてなかつたらしい。君が遺憾なく其の本領を發揮

して、世に森有禮の眞面目を知らしむるに至つたのは無論文部大臣としての仕事振りであつた。

君が外交官より轉じて文部省御用係となつた時は、嚴然として文部卿の椅子に凭つて居た人は、徳望當時に高かりし伯爵大木喬任君であつた。一方は思慮周密にして決して獨斷で事をせぬ細心な大木喬任、一方は例の獨斷敢行誰に遠慮會釋もない森有禮、同一文部省に夫婦役としては頗る妙な對照であつた。しかし大木伯の女房役としてなく、伯に代つて主人公たるべく森君は文部省に入つたのであつた。日進の時世に應じて日本の文政を料理して行くには、何しても新人物の手腕に依らねばならぬ、而して稜々たる森君の氣骨と辣腕とは、其の尤なるものとして認められたものであらう。乃ち當時の伯爵伊藤博文君が、十八年の十二月、官制の根本的大改革を斷行して始めて内閣制度を創設した。其の第一次伊藤内閣の文部大臣として森君は就任したのであつた。

▲獨斷の結果殆ど空想に陥る

既に文政の主腦者として重大な責任の地に立つた君は、我が文政の改善進歩に對して、いかに諸般の新施設に腦漿を絞つて居つたか。慘澹たる經營の苦心も、要するに例の彼一流の遣り方で、恐くは省中の下僚は一人として其の帷幄の議に參した者はなかつたであらう。萬事の安排は總て自家一個の方寸から割出して實行する。眞に大臣らしき大臣、恰かも文政全體の縮圖の如き觀があつた。尤も一世を曠ふする君が穎脱の才氣は、その自我の根源をなして居るから、何事にまれ他人の智慧を借りなければならぬ程自己を小なるものとして認めては居なかつた。されば彼は何より眼先が能く見え過ぎる。一事をなさんとすれば直に其の結果が頭腦に浮ぶ、常人には當然疑問として、其の結果に危懼を抱くべき場合にも、君は平然として樂觀して居る。自分の掘らせる井戸は必ず清水が湧き出るといふ。殆んど直覺的の感應があるかのやう、君の才氣は直に良好なる結果を擧げて了ふのであつた。けれども

清水が濁るか汚水が出るかは、掘てみた後でなければ知り得ぬと同様、君の豫想した好結果は案外な悪結果であつた場合も尠くなかつたのである。例へば日本の國語を英語に改めて了はうといふ君の腹案の如き、英人間にすら其の愚を嗤ふ者があつたのであるが、君は至極眞面目に其の好果を夢想して憧憬して居たものに相違なかつた。奈何せん、一文部大臣の細腕一つで左右し得るやうな簡單な問題でなかつたが爲に、變な省令をも見ずに濟んだのは、森君の爲にも將た又國家の爲にも慶賀すべき事であつた。

▲利害相半する彼の施政

果斷、英斷、事に臨み寧ろ猪突の勇を以て所信を遂行するのは、政治家としては最も尠ふべき天稟ではあるが、其の事を爲さんとするに方り、深慮熟圖、苟も詮考の失なからんとを庶幾するも亦政治家の用意である。森君は此の點に於て缺く所があつた。即ち寧ろ奇癖に偏したる政治家であつた。因循尸位を擁して何事も成し能

はざる伴食大臣に比して、その勝れる萬々であつたが、いかに穎脱の活才であらうとも、事に處して總て遺算なしといふ譯には往かぬ。隨分君の仕事には無理もあつた。我が文政に相當な貢獻をなして居る一方に又、可なり迷惑な引倒しも遣つて居る。所謂利害相半する結果を生じた。而して其の失策と認むべきものが、森君でなく、多少他の意見をも斟酌し得る宏量の人であつたならば、當然避け得べき底のものが多かつたのである。さはれ、森君にして這般の宏量を兼有したならば、存外又平々凡々たる伴食に終つたかも知れぬ。結局其の穎脱の才氣と旺盛な自我とが、森君をして非凡ならしめ偉大ならしめたものであつた。今、君の仕事に就て、その利害の兩面を例證して見やう。

▲大學月謝問題の紛糾

組織立つた事は説明が煩はしいから、茲には簡單な例を示すが、武戲體操、即ち今普通に學校で行つて居る兵式操練なるものは、抑も森文部大臣の創始したもので

ある。尤も是は森君が行らなくとも、後には誰か必ず實行したでもあらうが、當時未だ一般に普通體操の必要を切實に感じて居らぬ時代に、軍隊教育に類した武體操を學生に課するといふ事は、森君ならではの一寸思ひ及ばぬ仕事であつた。是迎も誰に相談して實行したのでもない、一に森君の創意に成つたのである、而して學生の體育上に偉大な効果を與へて居るのである。

當時大學の月謝は、月額貳圓五拾錢、一年中夏期休暇の二ヶ月を控除して、年額貳拾五圓であつた。然るに森文部大臣は突然大學に對つて、月謝は年額百圓たるべしといふ寢耳に水の命令を發した。其の理由は、歐米の例に徴するも大學校の月謝は年額百圓、貳百圓或はそれ以上にも及ぶ所がある。苟も最高の教育を受くるに、年額貳拾五圓といふ廉い月謝は何處にもない、少くとも百圓は納附すべき者であるといふ至極單純なものであつた。當時寄宿寮の賄費が年額五六拾圓で間に合つた時代に、月謝が從來の四倍年額百圓に上るとあつては一般の大學生には實に容易なら

ぬ打撃である。而も之を文部の一屬僚にも諮らさず、時の大學總長渡邊洪基君にすら一言の相談もなく、全く文部大臣の一存から斯様な突飛な命令を發したのであつた。サア、教授連は憤慨する、輿論が沸騰する。誰よりも、打撃を破る大學生の動搖は實に甚しいもので、激越の徒は大臣に直接談判に押懸るといふ騷であつた。斯く教育界無前の大紛擾を醸しながら、文部大臣は頑として命令を撤回しなかつた。紛擾の間に推移して、二十二年、時も二月の紀元節に、文部大臣森有禮君は狂漢の手に一命を殞して了つたので、その命令は自然消滅に歸して仕舞つたやうな譯であつた。

▲大廟に於ける不敬事件の顛末

大廟に參拜の砌り不敬の行爲のあつたといふのが、狂漢の森君を刺すに至つた理由であつたが、又一方の説には森君は決して不敬を働く所存はなかつたが、一般の參拜者から多少の冥加金を食らうがへに、特に理由なき參拜の階級を設け、その間

に私曲をはたらき、却て宗廟と國民とを疎隔し、千古不易の崇奉敬虔の誠意を薄からしむるに至る、神宮稱宜等の不埒を憤り、一氣の態度を以て彼等を威喝したのであつたといふ。何れにしても物に會釋なき自我の念が、遂に其身を亡すに至つたのであるが、その刺された瞬間に於ても君は猶不敬の成敗に瘡々とは思はなかつたであらう。無念絶命の出入には、月謝問題に膾炙せる大學生の手と取り違へて、君は不歸の客となつたものと私は私かに想像して居る。さりとては五十左右の活動盛りを非命に死なしめたのは惜しい事であつた。君をして長く文部の椅子に凭らしめたならば、或は多くの弊根をも貽したであらうが、又他人に眞似の出来ぬ勲業を樹て文政に貢献した事であらうと沁みく追懷されるのである。

▲内藤恥叟翁の憤激

終りに附言すべき一事がある。森文部大臣が或時大學に於て演説した折に、盛に米國の文物制度を賞揚し、例の遠慮會釋もなく日本の蒙昧野蠻を痛罵した。さすが

文部大臣の言であるから、多數の教授連も口を噤んで一語を發する者もなかつた。時に一人、肩を聳かし半白の鬚髪を戦がして怒鳴りつけた者があつた。左程御身は米國がお好きなら、とつと、米國へ歸化しておいで成され、日本は小さいけれども、一人の森有禮が居なくなつたからといふて、事は缺き申さぬと、威丈高に罵つたのは、水戸の老儒大學の名物教授内藤恥叟翁であつた。森君は勃然と色を作す、恥叟翁は頑然と搖ぎ出す、アツヤ一場の活劇を見んとした間に立ちて雙手を舉げ、出来したり當年の水戸壯士、老いても麒麟の鬚はしやんとした豪いものだ。と早速の氣轉に場中を笑はせ無事に其の場を繕つたのは、時の總長斯く申す加藤弘之であつたといふ説が、世間の一部に流布して居るさうであるが、其は私の關知せざる所で想ふに私の後を承けた渡邊洪基君の總長時代に起つた出來事であつたらうか、茲に傳説の誤謬を訂して置く。

實業教育の恩人故井上毅氏

寺田 勇吉

▲井上氏は實業教育の元祖

余は、文部省に二十年ばかり奉職して居た。其間文部大臣は屢々交迭した。けれども余が今日に至るも其人格を仰慕して已まないのは故子爵井上毅氏である。井上毅氏が文相たりし間に各方面の教育に治績を擧げられたことは、嗚々を要さない。けれども實業教育が今日の如く發達普及するに至つた淵源が全く井上子にあることは、餘り知るものがない様に思ふ。實に井上子は實業教育の元祖と言つてもよいのだ。

▲實業教育に對する氏の熱心

三十三年であつたと思ふ。余が獨逸を視察し同國の商工業が隆盛を極むる所以は、實業教育の發達にある事を感じ、歸朝して以來、再三實業教育普及の急務を申し述べたけれども、經濟事情が許さぬと云ふやうなことで、何時もそれなりに葬られて終つた。

然るに井上子が文相になられて此事を話すと一も二も無く余の説を容れ、貧弱なる日本を救うには實業教育を盛んにするより外はない。宜しい、斷行するから寺田君、君も一臂の力を添えて呉れと言はれた。其處で、余が種々と自分が實地取り調べて來た事を話して、殊に獨逸には理髮學校があり、サキソンには玩具學校までがあると言つた時には、子爵も少なからず驚かれたやうであつた。此頃でこそ日本にも理髮學校を設けるとか設けたとかといふけれども、當時に於ては實に珍らしいことに思はれたのである。

▲熱心の餘り肺を病んで仆る

無論其頃既に東京に於て一二の官立實業學校はあつた。けれども其後各地方到る

處に、商業學校、工業學校又は農業學校等が出来て、益々それが發達するやうになつたのは、井上子が、力をそれに致されたからである。井上子の時に至つて始めて實業教育費國庫補助法と云ふものが出来た。之に依つて子は盛んに獎勵方法を設けられた。實業補習學校なども實に此時に起つたのである。

子爵は自分の在職中に出來得るだけ教育を發達させたいと寢食を忘れてそれに頭を悩まされた。それが爲め遂に肺を病み、彼の實業教育費國庫補助法案を議會に通過させる際には子爵の病は既に膏肓に入つて居た。にも拘はらず子爵は病軀を壇上に運び、衰へたる唇から熱心に説かれたので、議員も其理非はさて措き、その熱誠に感じて直に可決して仕舞つた。

▲余は時に赤面する事があつた

子爵が熱誠謹正であつた實例は幾らもある。余が、永田町の官邸に伺候して歐洲の實業教育の模様を話すと、熱心に聽かれて何時までも歸へされない。夜の十二時

一時になつた事も珍らしくなかつた。元來子爵は文筆に堪能であつた人で、余が話すことを一々片端から書き留め『何うだこれで宜いかね』と云つた風に話が濟むと同時にそれを示されたものである。それから余が各地方で演説したことが新聞や雜誌に出て居ると、何時も屹度讀んで居られた。而して後で會ふと必らずそれに就て種々なことを聞かれる。時に赤面するやうなこともあつた。大臣ともあらうものが、一參事官位の説までも注意して一々見て置くと云ふとは珍しいことである。之に由つて觀ても子爵が如何に教育に熱心であつたかといふ事が分る。

▲子爵を紀念す可き多くの手紙

子爵が夢寐にも教育のことを忘れられなかつたと云ふことは余の宅に遺つて居る子爵の書翰を見ても解る。此の學校は怎ういふ性質のものであるから、此れだけ補助し、彼の學校は斯ういふ事情の下にあるから斯く處置をせよ。など、極めて細かいことまでも能く調べて一校の處分方までも自から筆を執つて命令せられた手紙が

幾通も遣つて居る。實に忠實なもので汽車の中でも静つとしては居ず、書類を取調べたり、手紙を書かれたりしたものである。子爵は返子に別荘を有つて居られた、月曜などは病痾でもあつたから別荘に行かれた。その折手紙を書いて途中の驛から出し「これから何處に行くから、何處まで何々の法案を起草して持つて来い。」など、云ふ手紙が途中驛から發されたものが、何通となく余が手許に遣つて居る。歐米などに比ぶれば未だ却々後れては居るけれども、兎に角全國到る所に實業學校を見るに至つた今日は、往時に顧みて實に大した進歩と云はねばならぬ。余は之を喜ぶと共に、何時も實業教育の基礎を作られたる故子爵を追懷するのである。

『名士の偉人觀』

政治家！

伊藤博文論

『日本及日本人』主筆 文學博士 三宅雄二郎

▲首相心得としての伊藤公

伊藤公は元勳であり、且つ其元勳の隨一であるが、所謂維新の三傑なるもの——西郷、大久保、木戸——を元勳とすれば、公は當に二代目の元勳に屬する。公は初め木戸に従ひ、後大久保に従つて事を爲したが、二人が亡くなつてからは自ら其後を受け継いだのである。斯の如く公は最初第一代目の元勳に隨つて事を執つたとは言ふものの、實力は早くから認められて居た。何か草案が大久保の前に廻つて來ると大久保は伊藤の判があるかと問ひ、あれば其儘で承諾すると云ふ風であつた。木戸と大久保の間に兎角面白くない事があつて、それで伊藤公が大久保の爲に働いたのは、他の一方に於いて不平の種となつたが、然し結局は二人の經營事業を一身に受

け繼いだ形がある。大久保は大藏卿になり、内務卿になり、また岩倉大使に副使として歐米へ差遣せられ、臺灣の役には全權大使として清國に赴いた程で内治にも、外交にも與つたのである。伊藤公も大藏少輔であつた事があり、外交にも與つた事があり、爾うして更に、内務卿ともなつた。何が専務とは言ひ難かつたが、大久保が事實上の首相であつたとすれば、公は其後繼者として、また貫目が備はらなかつたものと見るべきであらう。則ち首相心得として事に與つて、後、眞の首相となつたのである。

▲無特色は公の大特色

が、大久保の事業の一部分は、山縣公これを受け繼いで居る。内務卿としては寧ろ此方が多く働いて居る。けれども伊藤公の方は、文官の出であるにも拘らず、軍政にまで跨つて居る程、國政の全體に多く力を致した。國政の改善、憲政の創定、及び其進行、並びに外國との關係に力を致した。則ち一省の大臣として特に見るべ

きものは無かつたが、首相、若くは首相類似の職に於いて多く見るべきものがあつた。何の大臣になつても大抵功績があつたであらうが、遂に何が最も長所であつたかは分らずに終つた。けれども首相、又は首相顧問の如き位置にありては確かに其力量が現はれた。言はれ無特色といふ大特色を持つて居た。尤も後には再び首相となるやうな風は見えなかつた。恰も太政大臣を罷めて關白となつたやうな位置であつた。さうして最後にどうなるかと言ふ事は疑問であつたが、終に今回の凶變を以てその解決を告げた。

▲英雄の睡眠時間

公が微賤の出たるにも拘らず這般の榮譽を膺ち得たるは、一面甚だ幸運兒たるの觀があるけれ共、然かも天性人に優れた所があつたのは争はれない。第一身體が強健であつた。小柄ではあるが、よく釣合を保つて、丈夫に出來て居る事は珍らしい程であると言はれた。僅かばかり眠ればそれで絶えず働く事が出來た。

が、大事業を爲す者に僅かしか眠らぬ者は少くないが、長續きのする者は多くない。大抵一時は熱中して大に手を擴げるが、其割りに久しく持續すると云ふ點に於いて、缺けて居る嫌ひがある。ナポレオンでも、グラッドストーンでも、寝る時間は僅かであつた。そして其活動は目醒ましいものであつたが、目醒ましい割には長續きがしなかつた。グラッドストーンは之に反し、九時間眠らねば其日の仕事が出来ぬと言つた。さうして屈せず、撓まず、根氣よく一の目的を貫くのは此方であつた。何れも身體は強かつたが、強い中にもさう云ふ相違がある。而して伊藤公はその二つの長所を備へて居た。

▲創造の才ある者は反對を受け易し

公は又智力にも秀で、居た。隨機應變の才幹もあつた。靜かに事を謀る氣質もあつた。唯實行的といふのでなく、又唯物知りといふのでもなく、よく彼此を兼ねて居た。同僚は多く何れかに偏して居るのに公は其行く所可ならざるなしであつたので、

ある。頻りに立案などする必要がある場合、公が最も力を現はしたのも夫れである。明治十八年の末、官制改革と共に首相となり、引き続き政府の中心となつて居たのを、他に面白く思はぬ者は無いではなかつた。自ら一層適任と思ふ者もあつたのであるが、多方面に眼を配り、案を整へると云ふ事は他の爲し得ぬ所であつた。だからどうしても公に押し付けねばならぬ勢になつたのである。

處が、公が衝に當ると、兎角反對が出る。桂侯なり、西園寺侯なりの方が、却つて受けが柔かい、公の才幹を以て、何故巧みに人を操縦する事が出来なかつたかと言ふと、詰り、公に創造の才があつたからであらう。勢を見て移るに怠らなかつたが、何時も何か自ら案じられた傾きがある。自ら作り出すのは、唯勢に従ふよりも反對を受け易い。自ら作り出して反對を受けないと言ふのはよく、優れたのである。けれどもそんな者は滅多にあるべきものでない。ビスマルクがビュローより反對を受くる事が多かつたと言ふのも、畢竟自ら作り出すの能に富んで居たか

らである。

▲創始者にして實行者

伊藤公は曾に種々の案を作り出したのみならず、自ら人より先きに之を實行した。樞相となり、貴族院議長となり、統監となり、又大勳位を受けたなど、即ち此例である。何でも先んじて人のせぬ所をしようと云ふ性分が、やがて人に楯を突かれる所である。作り出せば、平地に波瀾を起すやうな事になる。公が衝に當ると反對の多くなつたのは全く夫れである。決して智力の劣つて居た爲ではない。其現はるゝ所が異つて居た爲である。だから反對を受けぬと云ふ事が、必ずしも善い事でない。反對を受けずして手腕の巧みなるを稱せるものならば、後全く忘れられたものには幾人もある。公は其類ではなかつた。

公は又徳義の點に於いて要を得て居つた。何故と言ふに、公の行動を一貫して居つたものは、誠實である。世には忠君愛國を飾り物にする者があるが、公はこれを

飾り物にせず、心からこれを念とするの志に厚かつた。如何に酒を飲んで酔つて居ても、天皇陛下の語を聞けば何時も容を改めた。慣れもあるだらうが、然し眞面目であつた。が、之に伴つて己れの名譽心も強かつた。着實の人から見ても可笑しいほど、苦々しいほど其念が強かつた。多くの英雄は榮譽の爲に活動する。彼等の名を萬世に垂れんとする慾望や實に熾烈である。さうして實に之が活動の重なる動機となつて居る。而かも公は名を好んで好まぬやうな風はしなかつた。テレ隠しをしなかつた。名譽を欲して、堂々と之を求めて居たのである。もつと包んで居れば奥床しく見えたかも知れないが、公は其邊に遠慮しやうともしなかつたのである。

▲蓄財の念薄きもの必ずしも廉潔に非ず

公は名譽心に強いのと共に、蓄財の念に薄かつた。或は蓄財と云ふ事に思ひも寄らなかつたかも知れぬ。けれども、それに就いて注意すべきは、蓄財に努めなかつたのを見て廉潔と稱する者があるが、さう一概には言へぬと云ふ事である。成程公

自らは蓄財はしなかつた。けれども必要に應じて、大抵の金額は辨じられた。井上侯は悪手段を用ゐて金をつくりと言はるゝ方であるが、公はそれと親友であつた。必要があれば其方で周旋もした。又政友會創立の際の如きも、或る邊より十萬圓出たのである。そんな風に自由に金が出来程ならば、別段金に焦れなくとも宜い。餘程慾深い者でない限りは金を貯へやうとは思はない。だから、廉潔として大に稱するのには、少しく當らぬ所がある。が、これに反し、世間では公は如何にも品行が悪い、狎々であると言ふ事を言はれたが、私は之は大に難詰すべき程の事でもあるまいと思つて居る。成程公には多くの場合女が伴つて居た。何處へ行くにも大抵それは附き物であつた。然し公は夜遅くまで人を對手にして居るのみならず、朝も早く起きるので、そんなに女と巫山戯て居る暇があるべき筈がない。唯人が煙草を飲み、茶を飲む位に之を相手にして居るのである。女を機械の如く弄ぶのは人道よりして咎むべきであつても、普通に淫亂と云ふが如き語を以て公を咎むるのは當つ

て居らぬ。維新頃からの慣れで自らも別段の事に思つて居なかつた。英雄色を好むと云ふも、公は色に溺れるやうな事があつたのではない。寧ろ溺れずして、非常に淡泊なのを訝られる程であつた。詰り公は、公にしては忠君愛國、私にしては名譽心、それが爲に殆ど全力を致して、他を顧みなかつたのである。

▲カプールと伊藤公

此の如く、公は體に優れ、智に優れ、徳に於いて亦劣つて居らなかつた。天性人に勝つて居つた公の立身は、時勢の爲でもあるが、決して偶然ではなかつたのである。我國で明治の時代のやうな前例は求め難い。随つて公に擬するやうな人を求める事は出来ない。強て求むれば桓武天皇の時代である。當時維新の運に當り、人物も大に輩出した。軍人も出で、宗教家も出で、學者も出たが、政治家と云ふ方は割合に現はれなかつた。だから伊藤公に比すべき人物を求め難い。他の國の例を求むれば、やゝ似通ふたものがある。伊太利の統一、獨逸帝國の建

設の如き即ちそれである。明治時代の國勢の發展は、伊太利の上で、獨逸の下である。公はもと自らビスマークに擬して居られたが、憲法發布の際演説した時には、特にカプールの言行を引用した。カプールならば公に對して穩かである。カプールは伊太利の統一に於ける三傑の一人で、若しガリバルディーを西郷とし、マヂニを木戸とすれば、カプールは大久保に當るべき所である。が、伊太利には此三傑に次いでこれと匹敵する程の人物がないではないが、餘り世に認められて居らぬ。處が、日本では維新の三傑より後に又三傑となすべきものがある。此意味に於いて伊藤公をカプールに比するのは間違つて居らぬ。寧ろ事實に於いては公の方が大きい。けれども其大ききを以てカプールより優つて居るとする譯には行かぬ。猶大久保の技倆が伊藤公の技倆に比して伸びなかつたのを以て、これを劣つて居ると言へぬと同じである。

▲伊藤公傳はカプール傳とビスマーク傳との中間

欠

MISSING

伊藤公の長短と大隈の長短

伯爵 大隈 重信

▲それはドウも困る

記者「毎度お伺ひして済みませんが、「伊藤公と吾輩との長短」と云ふ題目の下に一つお話しして頂きたいもので御座います。」

隈伯「それは何うも困る。それも第三者が言ふならまだ面白い。例へば伊藤公と吾輩との長短を山縣なり、井上なりが言ふとか、或は吾輩が伊藤と山縣との長短を言ふとかするならば宜いけれども、自分で自分の事を言ふのは甚だ面白くない。殊に對手は吾輩の親友で、且つ既に故人となつて居る人であるから、自分本位で其人の長短を言ふのは厭だ。尙一層適切に言つて見れば、野依とソコいらの新聞屋若くは増田義一との長短を、新渡戸博士なり、三宅先生なり、或は吾輩なりが言ふなら

宜いけれど、増田と野依の事を野依が言ふのは面白くないぢやないか。』

▲私と増田義一さんとの長短

記者「成る程一應御尤もだ。然しそれは凡人の言ふ事で、大隈伯の言ふ事でないと思ひます。伯と私と比較するのは失敬のやうだが、私も今に貴方のやうに偉くないと思つて居るから、云はゞ一種の氣狂ひである。要するに普通の人間より豪いのだ。少し違つた、普通人以外の人のやるやうなことをやつたつて差支へない。だから、私が増田と私との長短を言つたつて構はない。いふ、言つて見ませう。増田義一さんは商賣人だ。行く／＼は博文館の大橋新太郎さん見たやうになり度いと思つて居るだらう。それを誤魔化して如何にも立派さうに澄して居る人間だ。私はさうでない。吾輩は國士である。是から大いに爲さうと言ふ人間である。私は斯く言つて少しも恥かしくない。だから「貴方も伊藤公と吾輩との長短」と云ふ事で一つ話して下さい。チツトとも差支へないぢやありませんか。』

隈伯「さうか。随分無遠慮な事を言ふ奴だねえ。コレが野依式か。一體世の中には賢者と愚者があるもので、賢者即ち智者は、よく物の機變に達して居るものだ。さう云ふ人は、事に當つて直ちに全體の趣きを察するのみならず、是は斯うだからア、なる。あれはア、だから斯うなると。直ぐ其利害關係まで觀破して、鋭く巧く立ち廻つて行くものだ。」

▲吾輩は下愚の移らざる者

處が、吾輩は何方かと云ふと愚な方で、愚な方だから勿論機變にも達せず、吉凶禍福など云ふ事も豫め察する事が出来ず、随つて器用に世渡りをするると云ふ事は下手である。と云ふても、是は強ち君子は危きに近寄らずなどを氣取つた譯ではない。全く吾輩に機略縦横の才が無いからである。其處へ行くと伊藤公は智者であつた。才が利いて居た。此才子とか智者とか云ふ者は、前に云ふ通りそれは非常なもので、何でも一寸見たばかりで直ぐ解つて仕舞ふ。人の顔色を見ても、此人は怒つ

て居るとか、喜んで居るとか直ぐ察知して、如何なる輕微な事にも鋭敏なる感覺を持つこと、恰もかの地震計の如しである。さう云ふ人は、なかく利害の害を避けて利に移る事が巧い。然るに吾輩不幸にして、さう云ふ機敏な働きが出来ない。だから吾輩として何うも世の中の智慧ある者、伶俐な者に比する事は出来ない。随つて此愚者が賢者を批評する事は出来ない。兎に角、今日伊藤公と吾輩との長短を比較して、之を公にすると云ふ事は妙でない。

尤も、上智と下愚とは移らずと云ふ事がある。之は即ち最も優れた者と、最も馬鹿な奴は變化せぬと云ふ事である。處が、此上智と下愚との間に居る者は、所謂變轉極まりなしで、よく動く。併し人間の性質はそんなに馬鹿々々しく違つて居るものでない。大抵は似て居る。似て居るけれども只長い間働いて行く中に自から變化して來るもので、其處で一番偉い奴と馬鹿な奴と兩極を通じるやうに見えるのである。處で先づ今日の此問題を言ふと、吾輩は愚者で、所謂下愚の移らざるものである。

随つて何時も平氣なものだ、何だか上智のやうにもあるが、まさかさうではあるまい。大隈は偉いなど、云ふけれども、どうだか分らぬ。矢張り下愚即下愚だらうと思つて居る。其處へ行くと、伊藤公などは上智と下愚の間を巧みに經て行つた人で、なかく吾輩と比較するやうな譯には行かぬ。

▲吾輩は貧乏徳利である

人間と云ふ者は、兎角自分を非常に偉く見るかと思へば、又それと反對に無暗に自分を卑下して、何の値打もないやうに考へる傾向があるが、之は何方も間違つた話で、ドノ道人間と云ふ者はさう大した者ぢやない。然し人間は其境遇に依つて、偉くなつたり、馬鹿になつたりするものである。と言つて吾輩は絶對的の境遇論者ではないが、併し此境遇と云ふ事も人間の不幸利達に大なる關係を持つて居るものだ。處が、今言つた上智と下愚との中間に居る者は一度勢を得れば、虎のやうになるが、勢を失へば猫のやうになつて仕舞ふ。だから彼等は其勢を得る爲に、あら

ゆる機變に乗じようとかめるので、勢ひ目先が利くやうになるのである、處が、我輩のやうな下愚にして移らざる奴は、大して偉くもないから、何時も貧乏徳利のやうにして居る。然も此貧乏徳利も、轉げたまふごろくしてばかりは居ない。何か事にふれると、此中に酒を入れると云ふやうな役もするのである。」

記者「貴方の仰しやる事は、何うも漠として居ます。も少し具體的に、是は斯うあれはア、と細かく言つて貰ひたい。貴方は何時か、伊藤の長所は吾輩が一番能く知つて居れば、吾輩の長所も伊藤が能く知つて居た。然し今は吾輩が伊藤の長短を言ふ時でないから、も少し經つてから話すと約束したぢやありませんか。」

▲世間が大隈を理と云ふ所以

隈伯「否や、そんなに細かい點に互る必要はない。今我輩が言つた事を克く研究して見たら、其處に吾輩と伊藤公との長短が、趣味津津々たる中に現はれて来るだらう。吾輩の言つた事は、意味が深長だから、佛典や論語を研究するやうに、よく味

はつて見ないと分らぬ。」

記者「無論仰しやる通り、貴方の議論はなかく面白。けれども雑誌の讀者は、そんなに立派な人ばかりでないから、も少し誰にでも解るやうに、明さまに言つて貰ひたい。今貴方は自分の事を下愚などと仰しやるけれども、實際は上智なので、世間が大隈は狸だなど云ふのも、先づ其邊にあるだらうと思ひます。」

隈伯「さうか、此間も野依の雑誌に、「大隈の好きな奴と嫌ひな奴」と言ふ事で書いてあつたが、少し書き方が下手だつたやうだ。人を過ると思ふから一寸言ふが、吾輩は大言壯語する人を好くのおやない。あれは吾輩は陽氣な奴が好きだ、愉快な奴が好きだと言つたので。伊藤も大言壯語はしなかつたが、なかく陽氣な方で、其點に於いては吾輩下愚なりと雖も大に伊藤と一致して居る。」

記者「成る程、さうですかね。それでは私から私の知りたいと思ふ一事に就いてお尋ねしますから話して下さい。此處で先づ、世間は伊藤公は道樂者で、貴方

は品行方正だと云ふ風に言ひますが、貴方はそれに就いて何う思ひます。」

▲遂に五十歩百歩のみ

隈伯「さうか、難かしい問題だねえ、成る程伊藤公は道樂者だつたと云ふが、それに違はない。然し吾輩も道樂をしないからと言つて、さう見くびつたものでないよ。今は脚が斯うなつて居るからやれないが、若い時は随分やつたものだ。道樂する人間は活て居ると云れる位であるかも知れぬ、不道徳にならない程度では、道樂をやつたつても差支へないかも知れぬ。だから伊藤公が晩年まで道樂した事に就いて、吾輩が晩年に道樂をしないと言つて威張る譯には行かない。昔やつたと今はやらぬとの年數の差があるのみだ。孟子の言葉の中に、斯う云ふ事がある。兩方兵を交へて戦争をする。さうすると一方が敗ける。敗けた奴が逃げる。一人が百歩逃げると、一人が五十歩逃げた。さうすると、五十歩逃げた奴は、百歩逃げた奴を、何うも臆病だと言つて笑つた事がある。若し吾輩が今道樂せざるの故を以て伊藤公を

笑ふならば矢張り之と同じ事だ。焉くんぞ知らん、五十歩百歩だ。そんな馬鹿な事があるものか。」

記者「それから、世間ではよく、伊藤公は八方美人主義で大隈伯はそれと反對に敵が多いと云ふ事を言ふが、あれはどう云ふものですか。」

▲愚の愚なる買目が違ふ

隈伯「それも大きな間違ひだ。吾輩は大體陽氣な方で、よく議論もすれば話もするけれども、さう何時も喧嘩ばかりしては居ない。又吾輩はそんなにケンクワばかりする融通の利かぬ人間でもない。愚は愚なりと雖も、吾輩の愚は普通の愚と少し違つた愚である。聊か愚の愚なる買目が違つて居るのである。

それにしても、此頃は大分伶俐者が殖えたやうだ。然し之が社會の爲めになるかどうかと云ふと、少し考へ物だ。」

記者「その伶俐者とは一體何う云ふものか私にはよく分らないが、貴方の見たる

「例へば政治上の事ならば、貴衆兩院に就いて見れば直ぐ分る。財政、經濟、教育、其他あらゆる方面に例巧者が大分現はれて來た。此例巧者が所謂上智と下愚の間を、勢に随つて巧みに立ち廻つて行くのだ。然し一方から見れば、之は社會が腐敗した反照になつて居たかも知れぬ。」

「限伯」そんなに一々人の名前を擧げる必要はない。新聞を見れば直ぐ分るぢやないか。例へば政治上の事ならば、貴衆兩院に就いて見れば直ぐ分る。財政、經濟、教育、其他あらゆる方面に例巧者が大分現はれて來た。此例巧者が所謂上智と下愚の間を、勢に随つて巧みに立ち廻つて行くのだ。然し一方から見れば、之は社會が腐敗した反照になつて居たかも知れぬ。」

記者「成る程分りました。それでは今度は、伊藤公は優柔不斷の政治家で、貴方は果斷決行の政治家だと言ふ事を言ひますが、貴方のお考へを聞かして下さい。」

▲果斷不斷は施す人に依らず

限伯「それはどうも一寸斷言する事が出來ない。政治と云ふものは歲月の流るゝが如しで、戰場に於いて一舉にして勝敗を決するやうなものではないと思ふ。つまり政治が優柔不斷の如く見ゆるのは、其國其時の事情でさうならなければならぬ事

もあり、又決斷の無いやうに見えるのが、一の政略であり其方が却つて大に宜いのかも分らぬ。のみならず果斷不斷は外部からの刺戟にも大に關係のある事で、従つて其次第で偉大なる精神力が發揮されるやうな事もあるから五十年なら五十年間に其人が働いた結果を綜合して見なければ分らぬのである。切言すれば、人間は其人一個人では、そんなに幾らもの仕事は出來ない。必ず其處に其國其時代の勢と云ふものがあつて、其政治家に丁度宜い時代が來れば、其人の働きがよく伸び、従つて大に現はれる事になる。例へば外國の壓迫とか、或は東西文明の接觸とか云ふ時代其物が、人物を賢者にも、智者にもするものである。然し如何なる英雄豪傑たり聖人たりと雖も、人間に過ちの無い者はない。然るに伊藤はもう死んだ後で、成るだけ其過ちを隠して善を擧げねばならぬ。是人情の自然である。」

▲食ふ事を考へるのが不坦白か

記者「最後に、も一つ質問があります。それは伊藤公は金錢に坦白で、貴方は不

淡白だと云ふ事ですが、貴方のお考へは何うですか。』

隈伯「淡白不淡白と云ふのは、何う云ふ意味かよく分らぬが、第一、役人は奉公人だから、自分の地位さへ保つて居れば衣食住は與へられる。それが人に依つては其金の半分を使つて、半分は貯蓄する人がある。さう云ふ風にして大に富を起した人が果して悪いか、或は其無限の皇恩に浴しながら、其夥しい金を使つて仕舞つたのが果して宜いかは、斷言は出来ぬ。然し何れにしても食つて行けると云ふ事は確かである。處が吾輩の如きは、官吏を罷めてから今日まで、殆ど二十三年間は浪人者である。然しながら浪人と雖も食はずには生きて居られない。従つて先づ食ふ事を考へなければならぬ。食ふ事をする爲に努むる者が不淡白なれば、役人にして財を成した者は一層不淡白ではないか。單に食ふ爲ならば、商賣をやつて金を儲けると云ふ一點に力を注げば可いやうなものだが、然し吾輩不肖と雖も尙他に吾輩の適所ある事を知つて居る者である。我輩の弟が死んだ時、其廣大な地所が我輩の有

になつたので、我輩は残念ながらそれを賣つて一家の經濟を立てた事もある。然かもそれさへ中々賣れなかつた。我輩は又新聞をも起して見た。其爲には犬養や尾崎などを使つて見たが、うまく行かなかつた。報知新聞は三木にやらせて見たが、我輩の理想には叶つて居ない。随分癢に觸る事もある。それも儲けて行くので仕方ない——然し新聞と云ふものは、どうも多衆の凡俗を相手にしなければ立ち行かない。それで我輩は直接事に當つて居ないから、もう一切關せぬ事にして居るのである。之でも人は大隈は金に不淡白と云ふのか。

▲仕事をするのが不淡白か

我輩は又國民を養成する爲に學校をも起した。其當時我輩は政府から非常な迫害を受けた。教員などは皆擡いさらはれて仕舞つた。今も感謝に堪えないのは、其時三宅先生と兄さんとが來て講義して呉れた事である。それから福澤先生も來て教へて呉れた。おれは其恩に感じて居るから、今も三田から演説にでも來て呉れと言は

るれば、必ず行く事にしてある。又其未亡人の所へも寄つて、菓子折の一つも持つて行くやうにして居るのである。高田や、天野や、坪内などは幸に搔つさらはれないでよかつた。殊に流石の高利貸には手がつけれなかつたものと見えて、我輩が平沼専藏から金を借りた事に就いては何うもし得なかつたと見える。然るに我輩の此家屋敷は、もう森村其他の借金に對して抵當に入つて居るのである。それにも拘はらず、我輩は全力を盡して學校の經營をもすれば、又外國人などが來た時には、三百や五百の金を使つて御馳走もしてやる。若し我輩が、斯う云ふ風に社會に出て仕事をしないならば、なアに、一ヶ月三百圓もあれば食つて行けるのだ。門を閉ぢてジツとして居れば、家屋敷まで抵當に入れなくても宜いのだ。それでも我輩はまだ金の爲に節を屈した事はない。三井にも、三菱にも頭を下げた事はない。只下げた事のあるのは自分一個の爲ではない。學校と云ふ公共の物に對して、あつた。自分一個の力では出來ないから、助力を乞ふたのに過ぎなかつた。是でも人は我輩を

目して金銭に不淡泊と云ふのか。

▲貴方の晩年を安らかにしたい爲

のみならず、我輩は他人から迷惑を蒙つた事もある。恥かしい事だが、「開國五十年史」をやつて居る奴が、殖民會社を起すから金を借せと言つて來たから、吾輩は五萬圓を貸してやつた、所が此會社が潰れて、全損となつて仕舞つた。我輩が若し仕事をせず、貧乏らしく、浪人らしくみじめな生活をして居たら、あゝ大隈も昔は偉かつたが、氣の毒な様になつたと言つて金を持つて來て呉れる者があるかも知れぬ。佐野源左衛門のやうな風をして居たら、我は可哀相だと人が思つて呉れるかも知らぬ。けれども我輩はまだそれ程老ひばれはせぬ。我輩は猶大に生き、大に仕事をしなければならぬ。我輩は勝手許から苦情が出るけれども、人が我輩の處へ話に來れば、十人でも二十人でも飯位の出すやうに、用意してあるのである。我輩はもう宮中に入ると云ふ事もあるまいと云ふので、ダイヤモンドの入つた妻のブ

ローチまでも賣り拂つて斯う云ふ事をして居るのである。之でも野依、人は我輩を金銭に不淡泊と云ふのであらうか。』

記者「いや、實に御同情に堪へません。貴方は全く今の日本に必要な人物です。併し私が斯うして無遠慮なお尋ねをするのは、貴方に對する世間の誤解を解いて、貴方の晩年を安らかにしたいの微衷に過ぎないのです。どうか悪からず思つて下さい。實に社會は酷い。残酷だ。板垣さんだつて昔は偉い人だけれども、今は百圓位の生活をして居らるゝさうぢやありませんか、社會に正當なる判斷力がないからです。同情がないからです。』

隈伯「全く板垣は氣の毒だ。我輩にでも金があればドウかしたいと思つて居る。先達も娘さんの病氣の時醫者が行て見て來た話を聞いたが、實に同情に堪へない。三菱など同じ土佐の出でもあるし、又久松サンなども金があるから世話してもよさ相なものだが、それもしない様だ。世の中は實に残酷だ。』

死せる伊藤と生ける山縣

伯爵 板垣退助

▲伊藤は龍、山縣は虎

伊藤と山縣とは何方が偉いと聞くのか。私には一寸速答し兼ねるよ、と言ふのは外でもない、餘り兩人の人物を知り過ぎて居るからぢや。伊藤が龍なら、山縣は虎ぢや。山と言へば河と言つたやうに、伊藤と山縣の相撲は仲々面白いテ。維新の元勳も追々凋落して了つた。後に残つて居る功臣も實に微々たるものぢや。それでも伊藤が生きて居た頃は互に政界を縦断して随分目覺ましい活動もやつたが、今は山縣の一人舞臺で、先づ荒武者がダンビラを振廻して居る容である。何と言つても山縣の腕は凄いや。

二人共一長一短はある。伊藤は顔を見ても分る、あの通り豊頬にして粗髯で、如

何にも緋りのない面の中に見逃すべからざる一種の滋味が流れて居る。八面玲瓏で行くとして可ならざるなしと評せられた中にも、一種犯す可からざる威厳を持して行くといふ遺口が伊藤式ぢや、其處に行くといふ山縣は見るからに陰暗の面ざしで、彼の椿山莊が、明治の鹿ヶ谷と呼ばれて居る所以も先づ此處なんぢや。

伊藤には系統も乾分もない、御親類筋のない處が實は伊藤の偉い處かも知れぬ。伊東巳代治や末松謙澄なども乾分と言へば言へるが決して妙な因縁はない。伊藤がハルビンで悲惨な最後を遂げても、乾分が政界から失脚するとか路頭に迷ふなどの醜態を演ずる者は見當らない。之が他の政客であつたら随分憐れなものだらうと思ふ。

▲女は側に寝かして置く

伊藤は金を貯めたり、財力で權勢を張らうなどと云ふ野心は毛頭なかつた。金銭は収入の凡てを殆んど社交に費して居た。金といふものに就ては、全然面白味を感じ

じなかつた。伊藤は政治外交一點張で、其外には面白味は何物もなかつた様ぢや。兎に角、天下の料理鹽梅が彼の生命であつた。

精力主義の權化とも云はれた位、恐らく精力絶倫の點に於ては天下無敵であらう。時折其の横溢した精力を抑壓する能はずして、花柳の巷に折花攀柳の遊をやつて、随分淨名を流したものでやが、併し伊藤は凡人と違つて酒色に耽溺して國家を忘るゝのでなくて、女などに關する考も極めて淡泊したものだ。唯側に侍して置くのみぢや。

八方美人と云つて冷かした者も多いが、洒々落々の態度、包容大なる器量、それから外交や統轄の才が偉大であるとは、兎に角、私も敬服して居る、コ、ラあたりが今時の元老たちに嶄然頭角を抽いて居る所だらう。一面に於て大きな働をなす政治家は必ず半面には何等か大きな缺點が潜んで居る、だから半面のみを以て器量は定められぬ。

▲椿山莊の親分は斐い

山縣は乾分が山のやうぢや。こゝは伊藤と全く正反對である。山縣の權勢といふのは皆、乾分の働きて築上げられたもので、能く薩州人の精悍、長州人の粘着力、土佐人の先見、肥前人の豪放と云つて並稱するが、山縣は確かに長州人を能く表しとるわい。彼れは全力を盡して乾分の養成をやつてゐる。山縣は何處までも執着心が強い男で、一度見立てた乾分は何時までたつても見はなさぬ。

伊藤が逝くなつてから政界は淋しい。處が山縣系が貴族院に陣取つて居て時々チヨツかきを出したり小競合を挑んだりするので聊か面白い。實際現時では山縣に匹敵する者はない。今ぢや桂内閣の顧問と云ふ役、何しろ彼の勢力は地雷火のやうで何處に如何なる伏線が敷かれて居るか分明でないが、山縣系の實狀を少しでも讀み得る者は、意外に勢力範圍の廣いのに驚くのもぢや。

山縣系の政治家は皆武斷的で、長州人の殆んど凡ては此の系統に屬して居て、伊

藤系の文治派と相對して、軍人社會に根柢ある閥を形造つて居る。天下は山縣系の天下ぢや。御機嫌伺ひに出て來ぬ政客は大を爲す能はぬ程ぢや。

井上馨は世人から貨殖以外には何の趣味も有たぬと思はれた位、金に趣味を抱いて居る、乾分も相當に造つた。併し古來、金で結んだ親分乾分の關係といふ奴は、親分が死んで了ふと、それを便りにして居る乾分が直ぐ困る。政治家が金で左右され且動搖するやうでは到底天下の料理は出來ぬ。然るに、現時はソんな風潮が能く上下に瀾漫して居るやうぢや。

▲板垣が終世の希望

板垣が貧乏なことは、天下の人皆知つて居る、けれども貧乏は決して恐るゝに足らんと思つて居る。従つて別に妙な考もないから、他の富裕な政治家のやうに自家の勢力扶殖に腐心することはない。下らぬ名利心に支配されるやうな愚はなさぬ積りぢや。

一國の政客が政治に興味を持たずに、金や物質の俘虜になるやうでは、遂に有終の美を完ふすることは出来ぬ。世の笑草となつて遂に歴史に汚點を残すのみぢや。古來、かゝる事例は珍らしくない。威武に屈せず、富貴に淫せず、侃々諤々唯専心國家を念頭に置いて横論縱議するのが即ち政治家の本領である。板垣終世の希望は健全なる社會改造にある。私は幾多の堅實な政客が出で、社會改造を叫ばんことを希望する。

生前多く世俗の誤解を受けたる陸奥伯爵は
果して如何なる人物なりしか

伯爵 林

董

▲陸奥は果して陰險老獪の人なりしか

我輩が陸奥君に初めて面會したのは、二十一歳の時であつた。中頃少し途切れたこともある。が兎に角、それ以來ずつと兄事し、先輩視して居たのである。だから

世間の人の觀るところと、我輩の觀るところとは多少の相違があるだらうと思ふ。自分の親とか先生とかのする事を見ると、何でも豪いと思ふやうに、我輩が陸奥君を譽めるのは、或は過賞になるかも知れないが、然し實際譽めるより外仕方がない。第一斷つて置きたいのは、今日ではさうも思ふまいけれども、陸奥君の生きて居る間は、多くの人から極く狡猾な人と思はれ、權謀術數に富み、人を陥罪するのを何とも思はない人のやうに言はれて居た。然し、我輩の見るところでは決してさう云ふ人でない、信義に厚い人であつた。普通世間の人から擯斥される人、又實際世間から捨てられるのが當然と思はれるやうな人をも世話して居た。あんな人をよく保護して居ると思つたことが屢々ある。尤も、それは何も金錢を遣つて世話をして居たといふやうなことではない。

▲彼の趣味

それから、も一つは、非常に慾張つて、人を突き倒しても金を拵へる人のやうに

思はれて居たが、なか／＼そんな人ではなかつた。寧ろ清廉潔白であつた。それだから、少しも家に資産を残して居らぬ。それで大抵人格も分るだらうが、一方に於いて膽智と云ふものを十分持つて居た。従つて相應の膽力も出て来る。其膽力と云ふても、暴虎憑河の勇でなくて、智慧があるから、此位のところまでは行つても大丈夫と思ふ所まで進んで行く。愈やり損なつたら、殺されても仕方がないと云ふ觀念は十分あつたのである。あの人の行つた事の跡を考へると、さう云ふ人格の人であつたと思はれる。

それから、あの人は他に娛樂を求めると云ふことがなかつた。詩も作つたけれども、作るのが好きではなし、碁も打つたが、カラ下手で、何にもする事がないから仕方なく碁でも打たうと云ふ方であつた。女も嫌いではなかつたが、藝者を揚げて騒ぐのが好きと云ふでもなし、さうかと言つて他に娛樂と云ふものもなく、寢ても起きても政治の事はかり考へて、寧ろ始終其方に屈托して居るのが樂みと云ふ風にあつたと思はれる。

見えた。最も書物は好きであつた。便所へ行くにも持つて行つて讀んで居られた。

▲此上もなき外務大臣

私は彼の人を外務大臣としては、此上もない適任の人であつたと信じて居る。で、何をやるにも、筋はチャンと立つて居た。さうして一體が氣の利いたやり方をして居た。

例へば、或る事件に就いて、或る國の公使が陸奥に會つて應接した。何か込み入つた話であつたらうが、翌日其公使が前日話し合つた事を書面に認めて持つて來て是を本國へ報告しやうと思ひますが、間違ひは御座いませんかと言つて差し出した。すると、陸奥はそれを見てズツと訂正して仕舞つた。見ると前日差向ひで話し合つたとは随分違つて居る。そこで公使が、是では昨日の話とは大分趣が違つて來ましたが、是で宜いのですかと聞くと、イヤ、それは趣が違つて居るかも知れないが、私が昨日話した趣意は其通りであつたので、話した正合と違ふやうに思ふところが

あるかも知れぬが、矢張り此書面に認められた方が確かである。今日訂正したのを本當の趣意と御認めになつて宜しいと、斯う言つた。然し、大變違つて居るので、公使がまたさう云ふと、あなたの方で違つて居ると思つたら訂正して御覽なさい、昨日話し合つたことで分つて居るとは思ふが、書面にすれば記名調印して差し出すのも同じであるから、能く注意して斯う訂正しなければならぬ。何方が本當かと云ふお尋ねなら、今日の方が本當であると言ふので、其公使はさうですかと言つて居つた事がある。處が、是が一寸容易く出来さうな事で、なか／＼やり悪い勘當だ。一寸の機みで言ひ過ぎたと思ふとことも、書き直すと云ふ事は外國公使に向つてはやり悪いことだ。話す時は勝手に話が出来るが、一々後で書いたものになると、是は斯う、あれは斯うと、頭へ受取る事が極く機敏であるから、訂正する所も何も總て考へて居る。それで随分面白い事もある。

▲某國公使に無い猪をやらうと約束す

是は少し遣り損ひだが、或る時、某國の公使と汽車の中で出逢つて、猪をやらうと約束して了つた。話のいきたてで、幸ひ家に猪があるから上げませうと云ふ事になつたのだ。處が、實際家には無い。そこで人を八方に走らして、やつとの事で一疋の猪を買入れて贈つたと云ふやうな事もあつた。一體のやり方が總てそんな風で、此位の所までは確かに行ける。是以上は行かぬと云ふ目標をつけてやつて、それで行かなければ此方で行くと云ふ風に、前以て機略の縦横を考へてやつて居る。それで、親しく使はれて居た者は、皆親切に待遇せられるのに感じて居たから、働き手も大分居た。星亨なども能く陸奥の爲に働く方の人であつた。

余が初めて岩倉右大臣に對面せし時の感想

男爵 後藤 新平

▲長興專齋氏と余との關係

吾輩が初めて岩倉公に對面したのは明治十六年二月の事であつた。其時我輩はちやうど二十六歳で、名古屋愛知病院の院長をして居つたが、衛生局長の長與專齋氏が吾輩に書を寄せて頻りに上京を促した。それは、以前私が衛生の事に關して何か衛生局に建白した事がある。其建白書が長與氏の氣に入つたものと見えて、上京すれば少納言に推薦してやらうといふ文意であつた、餘り熱心に勧めて呉れるので、三度目の時に其事を石黒(忠應)男に相談した。すると石黒男は爾ういふ事ならば行くが宜い。地方の病院長から少納言にして遣らうといふのは、先方でも餘程拔擢した積りだらう。と言はれたけれども、其頃、同じく名古屋病院院長であつた横井氏が、長與氏と仲の悪い人であつたので、頻りに吾輩の上京を止めた。それに病院の患者連も頻りに私の上京を止めて、若し此儘名古屋に居て呉れるなら、家も建て、上げませうと云ひ出した。

▲衛生局長の代理として初めて公に對面す

家を建て、呉れるといふた處で、まさか、名古屋城ほどの邸宅を拵へて呉れるといふ譯でもあるまい。何うしやうかと思つたけれども、折角、皆が止めて呉れるので、今少し名古屋に留まる事に決めて、兎に角、東京から父母を呼び迎へやうと思つて上京した。其時長與氏に遇つて見ると、氏は喜んでどうも好く早く来て呉れた、一昨日打つた電報を見て来たのかといふ。吾輩は、いゝえ、それは話が違ふ、今度上京したのは名古屋に兩親を迎へる爲に來たので、貴下の召に應ずる爲に來たのでは無い。電報は大かた私の留守に着いて居るでせうと云ふと、長與氏も左様か、實はアノ電報で來たとすれば餘り早過ぎると思つた。マアそんな事はどうでもよろしい、此儘此方に勤めてはどうかといふて呉れる。其處で吾輩は役人はイヤだと言つて少納言を辭退して、其代りに衛生局の御用係今言ふ囑託の様なものになつた。月給は少納言同様に百圓宛貰ふ事になつた。

それから一ヶ月ばかり經つて、明治十六年の二月、ちやうど時の右大臣岩倉公が、

熱海に滞在中、用事とあつて、長興衛生局長をお召しになつた時、長興氏は其代理を吾輩に命じた來た、吾輩は長興氏が吾輩のやうな窮措大に憊んな大役を命ずるのは、よく／＼吾輩を信じて試験の爲にするのだなと思つたけれども、構ふものか、何でも自分の思つた通りに遣つて退けやうと決心して、いよく熱海へ出掛けて行つた。

▲呼び捨てにし乍ら宿屋の世話

其時熱海で右大臣に對面したのが、抑も吾輩が大臣といふものに會つた初めであつた。それから大臣の旅館へ行つて見ると公は「其處へ來たのは後藤か、此方へ入れ」といはれた。吾輩は心の中で大臣といふものは偉い權幕のものだ。初對面の人を呼び捨てにして平氣な顔をして居る。と思つて居ると「お前は何處に泊つて居るか」といふ「鈴木屋に泊つて居ます」と答へると、「何故此處へ來なかつたか」といふ。公は其時相模屋といふ宿屋に泊つて居られた。「此方は嘸御混雜だらうと思ひま

して——」といふと岩倉公は「それぢや直ぐに此方へ來ら宜からう」と言ひながら、山本と言ふ祕書官を呼んで「何故出迎ひに行つて乃公の宿に連れて來なかつたか」といふ、「いや、今朝は大變雪が降りましたから、お着はきつと遅からうと言ふのでツイ控へて居りましたので、誠に濟みませんでした。」と答へて座を去つた。後藤後藤と呼び捨てにして居る半面には宿屋の事まで心配して呉れる。十分細い處まで氣の届く偉い人だなと、其處吾輩は非常に感心した。

それから色々話をした結果、公は貧民の爲に熱海の温泉の出る口許に、肺病患者などの用ゐる吸氣管を拵へて呉れる、好い考があつたら直ぐに掛つてほしいといふ事であつた。其處で吾輩は、それはいけません。色々物理學上からも考へて拵へるのですから、貴下のいふやうに今直ぐといふ譯には行きませんと、無遠慮にドシドシ云つて退けた。それから、吾輩は公に對して、凡そ貧民病院に二種がある。一は人間の拵へた病院で、一つは天然の病院である。即ち熱海の如き此天然の病院に

は、吸氣管などよりも寧ろ下水や水道の設備を完全にしてやる事ではなくてはならぬと論じた、すると、公も連りに首肯して居られた。

▲驚く可き公の威嚴

話して居る内にカステラの菓子が出たので、私は何の氣もなしに二ツある内一ツ半ばかり食つて仕舞つた。やがて其處へ入つて來たのが、伊藤侍醫である。すると公は相變らず、「此方へ來い」と頷でいふ。吾輩は心の中で、オヤ／＼乃公だけにある態度をする事かと思つたら、誰にでもするのだな。大臣といふものは偉いものだと思つて見て居ると、伊藤侍醫は、摺り膝をして入つて丁寧挨拶した。吾輩は高貴の人の前へ出るには、あんな事をしなければならぬものか、知らないで無遠慮な事をしたと思つて居ると、公は例の吸氣管の相談を持出して、吾輩の説も話した上、お前は何う思ふかと云はれた。すると侍醫は「イヤ、後藤さんの云はるゝ事も御尤もで御座いますが、大臣のお仰る事も御尤もであります」といふた。其處で吾輩

は大臣などに物を云ふには、あゝいふ調子に遣らなければならぬのだなと心で首肯して居た。

すると、今度は其處へ文部卿の福岡孝悌と云ふ人が入つて來た、公は矢張り「ア、福岡か此方へ來い。之は後藤といふので長興の代理に來たのだ」といふで紹介した。此人は例の擦り膝はしなかつたけれども、可なり丁寧にして居た。それに續いて外務卿の井上馨さんが入つて來たけれども、岩倉公は相變らず井上々々と呼び捨てに呼んで居た。それから印刷局長の得能と言ふ人が來た。此人は大風ではなかつたが、之までの人に比べて極めて無頓着に入つた來た。爾うして、之等の人達も皆菓子は貰つたけれども、些とも手を着けない、吾輩は又一つ失敗をした譯である。

▲後藤に菓子を持って行つて遣れ

やがて、伊藤氏を初めとして、井上、福岡、得能の諸氏といふやうな順序に、皆辭して歸り初めた、黙つて見て居ると貰つた菓子は皆紙に包んで持つて行く。吾輩

は此時初めて高貴の人に貰つた菓子に紙に包んで持つて歸るものだといふ事を知つた。其處で喰ひかけのカステラを半分紙に包んで、自分の宿に持つて歸つた。

仍下、吾輩は其晩から鈴木屋を引き揚げて相模屋に泊る事となつた。處が、隣室に肥田濱五郎といふ公に昵近の海軍機關總監が寝て居て、襖越しに隣室は誰ですかと聲をかけた。吾輩は後藤ですと答へると、吾輩は肥田といふ者だが此處を開けて一處に話をしやうぢや無いかといふて、襖を開けた。其處で肥田氏は、馬場下の老爺はナカ〜親切で頻りに君を譽めて居つた。菓子も言傳かつて來たから明朝渡さうといふた。吾輩は馬場下の老爺といふのは誰の事かといふて聞くと肥田氏は岩倉公の事だと答へた。之は岩倉公が櫻田の馬場下に邸宅を構へて居られたからである。何ういふ譯で菓子を呉れたのだらうといふて聞くと、それは誰でも菓子を紙に包んで歸るのに、後藤ばかりは乃公の前でムシャ〜食べて歸つた處を見ると、餘程菓子が好きと見える。後藤は實に面白い奴だ、あの子供に菓子を持つて行つて遣れと

いふて、岩倉公が肥田氏に言傳けて呉れたのださうであつた。吾輩は今更のやうに公の偉い處に感心した。公は斯くの如く、一點大名風の無い、極めて磊落な人であつたけれども、又些細の事の末に至るまでも氣の附く、用意周到な人であつた。吾輩が今話した、宿屋の事と言ひ、菓子の事と云ひ、初對面に於て得た印象に就て見ても、公は實によく注意の行き届く人であつた、之は吾輩が初めて對面した時の感想である。

初對面に於て余が勝海舟伯より 受けたる印象

男 爵 後藤 新平

▲感興の生ずる途は横を向いて話す癖

吾輩が初めて勝伯に面會したのは、何時の事であつたか、確か、高野長英先生の

書いた諸葛孔明の「出師表」を持って行つて、其鑑定をして貰つた時であつた。それは大畫箋紙位なものに書いたものであつて、未だ表装も何にもしてなかつた。其時一つ奇妙に感じたのは勝伯が初め初対面の人に對して横を向いたまま話をして居る事であつた。それから、段々話が興に入つて來ると、何時の間にか相手と正對して來る。其處で、初めて遇つた時には餘程奇態な癖を持つた人だと思つた。伯は吾輩が持つて行つた高野長英先生の手蹟を展げて、凝然と見詰めて居たが、吾輩の方を向くと儼然容を改めて、「お前は何うして之を持つて來たのか」と問ひ掛けた。

▲佛然色をなして余の無禮を責む

吾輩は變な問を發する人だとは思つたけれども、「只先生の書を鑑定して貰ひに來ました」と云ふた。すると伯は「イヤ爾うではあるまい」と云ふ。「爾うです」と答へる。二三度同じ事を押問答して居ると、今度は伯が「お前は、此手蹟が餘り立派に書いてあるから、之が高野長英の眞筆か何うかといふ疑を起して持つて來たのだ

らう」と問はれた。吾輩が「爾うです」と答へると、其處で伯は佛然色をなして吾輩を責めた。「お前は不都合な男だ、今時の洋學者などといふ奴は、一體自分の名も碌々書けない者ばかり揃つて居るから、恁う云ふ手蹟があるとそれを疑ふのではな

いか、實に先輩を辱める不埒な所爲と云ふ可きである、自分を以て故人を推すといふ事があるか。」と云はれた上に、「抑も此書は、一氣呵成に書いたものであつて、徹頭徹尾筆者の精神が活躍して居る。即ち之は唯單に文章を寫したと云ふばかりでは無い、筆者が孔明の壯烈な意氣に感じ、其文章を盡く暗誦して居て一氣呵成に書いたものである。之が分らないか。」と聲を勵まして云はれた。

▲乃公の頃は上下に伸縮自在である

それから「之はもう少しも疑ふ所はない、高野長英の眞筆である。早速表装をし

ろ、爾うすれば乃公が箱書をしてやる」と云はれたので、吾輩は大に喜んで、其後箱書をして貰ひに行つた事がある。其時伯は「お前は醫學をやつて居るさうである

けれども、人間の頸の働きの知つて居るか」と云はれた。其處で吾輩が「知つて居ます」と答へると、伯は、「處が普通人間の頸の働きといふものは、左右に廻轉させるか、上下に背くか、それより他に働かせる事は出来ない、今普通の人間が頸を左右に廻轉させて見た處で、僅かに後の方を見る事が出来る位のものであるけれども、乃公の頸は決して爾うでない。上下に伸縮自在である」と、伯は得意満面で話された。吾輩は實に伯が不思議な事を云ひ出したと思つて聞いて居た。

▲大久保も西郷も上下に伸縮する頸を持たざりき

「それから、見よ、大久保でも、西郷先生でも（西郷丈は先生だ）又高野長英でも此上下に伸縮する頸を持つて居なかつた。勢窮し、事決し難き時に當つて、自分の頸を伸して向ふを見る事が出来ない。若し此働きのあつたならば、向ふに別天地が見えたと違ひない。別に見える所があつたに違ひない。此働きを忘れて仕舞つて、突嗟の間に事を決めて仕舞はふと思ふから、竟に不慮の最後を遂げなければならぬ事になつて来る。乃公なども、實に彈丸矢石の間に刀を携へて出入した事は幾度であつたか判らない。而も今日首足を全うして國家の爲に盡す事を得るのは、真に此頸を上下に伸縮する事が出来たからである。」と、伯は云ふた。吾輩は此話によつて初めて勝伯の偉大なる所以を知つた。

▲勝は唯生命が惜くて生き長らへたのでは無い

伯は猶語を繼いで、「乃公は唯生命が惜くて今日迄生き長らへた譯では無い、乃公は眞實に長壽の法を知つて居たのだ。お前は何處かに好い所があるから此長壽の秘傳を教へてやる。決して忘れちゃ好けない。」と、恚う云はれた。上下に伸縮する頸の働くと云ふのは、電光石火、如何なる突嗟の間に處しても、緯々たる餘裕を存して、常に眼を大局に放てといふ教訓であらう。吾輩が初對面に於て勝伯から受けた印象はマア恚んなものであつた。

後藤象二郎伯の『青天白日』主義

井上角五郎

▲福澤先生の推薦によりて後藤伯の知遇を受けるに至りし事
私は、少壯時代に三人の先輩から、忘るゝ事の出来ない知遇を受けた。福澤先生、小林先生、これは其頃帝國大學の助教授を勤められて居た、私とは同郷の人である。それから、後藤伯で、抑も私が後藤象二郎伯の知遇を受けるに至つたのは、福澤先生の推薦である。それは明治十四年の暮であつたかと思ふ。後藤伯が先生を訪ねて慶應義塾の出身者中に、後來有望な人物があるなら二三私人の宅へ出入する様にして貰ひ度い。交際して見た上で事に依つては共に諮り度いことがあると云はれた。そこで破帽弊衣、如何にも穢苦しい一介の書生は忽ちにして高輪の邸宅に出入することになつた、後藤伯の邸宅は中々宏壯華美のものであつた。福澤家の一食客も後

藤家の門に入れば、宛然、貴公子の如く女中や書生に丁寧に取り扱はれ、時が来れば伯と一緒に膳に就いた。夫れにまた伯爵夫人は世人も知るが如く、學識もあり、才智もあり、殊に維新前後に於ては、伯に隨つて京阪の間を東西に奔走せられた事がある。談話は如何にも面白く又た有益なものであつた。此夫人が、私を非常に愛撫して呉れたので、私は讀書に倦み、文章に疲れたとき伯の邸宅へ行くを何よりの愉快な、仕合な、又有益な事として、漸次同家の人々と親密になつたのである。

▲大同團結時代に於ける余と後藤伯との關係

其後、私は間もなく朝鮮に行く事となつた。福澤先生も、後藤伯も當時大に朝鮮問題に利害關係を持つて居られたので、私は屢々朝鮮と本土との間を往來したが、其都度後藤伯と面接するの機會を有つて居た。私が『時事新報』の記者となつた當時も、私は常に伯の邸宅に出入した。それから、亞米利加に行つて歸つて來ると私は忽ち獄裡の人となつた。此入獄事件は直接に後藤伯と何等の關係もなかつたけれど

も、豫審調書には、後藤伯の名前が處處に書いて有る。入獄してから十三ヶ月目に
恰度憲法發布で特赦せられた。出獄して見ると亞米利加の移民事業はもう既に失敗
に終つて居た。夫れやこれやで獄中の不平は私を驅つて、當時伯の組織せられて居
つた大同團結に加入せしめた。私は大同團結の書記長でもあり、又伯の秘書役でも
あつた。彼れ是れする中に伯は政府に入られる事となつた。其處で大同團結は分離
して、其半は反き去つた。私は其殘黨と共に内閣に居る伯の後援をする事となつた
が、其殘黨も遂には散じ去つて、伯は内閣に孤立するに至つた。私は伯の知遇に感
じて居つた爲め且つは伯の當時の眞意を知るが故に、踏み止まつて伯に隨つて居た
第一期以來、私が衆議院議員として世間から吏黨とか、軟派とか云はれるやうにな
つたのも之が爲めである。私は伯が歿くなられる迄、常に信用せられた。殊に明治
二十六年、炭礦鐵道會社の重役となつて、獨立する迄は、自分の生活費の總てを
伯から貰つて居たのである。私と伯とは恚う云ふ關係であつたから、私が伯から受

けた感化は實に夥しいものであつた。私が今茲にお話しやうと思ふのは伯の教訓の
一端である。

▲青天白日此是丈夫之心

後藤伯は、宏量大度の偉人であつて、常に遠大の志を抱いて居られた。され
ば人を用ふるにも清濁併せ呑むと云ふ有様であつて、伯の幕下には、濃厚篤實の君
子も居れば、辛辣精悍な人物も居つた。所謂鷄鳴狗盜の徒に近い人物も甚だ少な
かつた。之は誰でも能く知つて居る事であるが、伯は又漢學の素養があつて、些細
な點まで注意の行き届く人であつた。伯が或るとき私に書いて呉れたのが、今、私の
居間に懸かつて居る『青天白日此是丈夫之心』と云ふ文字である。伯は好く話の端
に此『青天白日』と云ふことを云はれた。福澤先生の主義を『獨立自尊主義』と云
ふが如く、私は後藤伯の主義を『青天白日主義』と名づけて見たいのである。
後藤伯は常に私共を誡めて、人間は、成功とか、失敗とか事に當るとき直ぐに其

結果を豫想するけれども、是れは宜しくないと云はれた。又成功失敗で喜んだり歎いたりせらるゝことはなかつた、故に伯は仕事を私共に吩ひ付けて其結果が假令へ悪からうとも、決して擧面をするやうな事は無かつた。其かはり、其結果が好かつたからというて、特に喜んでも呉れ無い。要するに伯の重きを置く所は、事の成敗に在るので無くして事に對する其態度如何に在るのであつたからである。伯は常に云はれた、目的は須らく雄大な善良なものを選まねばならぬ。計畫は周到なる注意と慎重なる準備とを必要とする。而して愈愈之を實行するに當つては、水火も辭せず成敗に頓着なく斃而止の決心を以て猛進しなければならぬ。と、是れが伯の平生の方針であつて、伯は常に重きを其人の之に對する誠實如何と云ふ事のみ置き置かれた。

▲渾身の熱誠を傾盡するのみ成否は問ふ所にあらず

其處で、人間は渾身の熱誠を傾盡して事に當れば、敢て事の成否を問ふ必要はないのである。人生に於ては成功も失敗も、其周囲の事情によつて定まる場合が多い。

世には運命と云ふことがある、不思議に成功し、不思議に失敗する、夫れであるから成功必ずしも誇るに足らず、失敗必ずしも羞づるに足らぬ。之を喩へて見れば、茲に狩獵規則に依つて鑑札を受けて遊獵に出掛ける人があるとする。此人の目的は必ずしも鳥獸を射殺してそれを料理して喰ふといふことに在るのではない。腹を肥やし之を味ふのが狩獵の重なる樂しみではない。山野を驅馳して獲物を見附けた上に、それを覘ふと云ふ處に娛樂の目的があるのである。然るに世間の人は動ともすると成功した者を褒めて、失敗したものを貶す。鳥獸の居た場所や當時の有様を考へて遣らず、甚だしきは肉の味で狩獵の巧拙を評判する。それに乘つて常人が又命申すると否とにのみ熱中するは共に丈夫とは云はれぬ。青天白日此是丈夫之心で、一言一行、總ての計畫、總ての目的、總ての働きが、何人に話しても此の恥づべき點がない。即ち俯仰天地に愧ぢないと云ふ確信があればそれで好いのである。漢の高祖が七十五遍も連戦連敗した時に、失敗を氣にして徒らに成功のみを望んで居た

ならば、所謂苦悶の結果遂には中途に氣でも違つたであらう。自分に計畫も良い、目的も良いと確信して戦つて居る所に漢の高祖の青天白日の精神があつたのである。

▲伯の所謂青天白日の意義

以上、私のお話した事は、後藤伯が纏めて私に話した事ではない。伯が時に觸れ事に當つて私に話された事を綜合して述べたのである。之は別問題であるが、一般に此「青天白日」といふ語の意義を冤罪が解けて身の潔白が證明された場合などに限つて用ゐて居るやうである。けれども後藤伯は、一言一行自ら願て天地に愧づる所の無いのを青天白日の精神といふて居るのである。如何に失敗するも、如何に不幸に遭遇するも、如何に世間から非難せらるゝも、是れは周囲の事情の爲めであつて、自ら願みて恥づる所なければ是れが青天白日である。伯の所謂青天白日は此様な意味である。

此頃世の中に男子の往々に煩悶するものがある。此等は成功を無暗に急ぎ、若し成功が六づかしいと見た時、又は失敗した時忽ち自殺したり、自暴自棄するに至るのであるが、伯の云はるゝ様に一言一行青天白日を主義として、何時でも微笑して死に就くの決心があつたならば、成功を急ぎもすまい、又其爲めに煩悶するやうな事もあるまい。私は此説が幾分世間の爲めになる事を信じて疑はないものである。

巨人後藤象二郎と才人後藤新平

早川 鐵冶

▲兩雄一堂に會す

後藤と言へば、響の聲に應ずるが如く直ちに二個の人物を想起する。故象二郎伯及今の新平男之れである。二人共思切つて面白い男だ。新平君を象二郎伯に始めて紹介したのは吾輩である。時は相馬事件の起る少し以前、場所は精養軒、當時後藤伯は農商務大臣、吾輩は其の祕書官で、宛も伯と晚餐を共にした席上であつた。ス

ルト伯は其の後で言はるゝには、「後藤は匿者だが中々偉い、今は僅かに衛生局長に過ぎないが、あの腕前で見ると、逆も今の儘で甘んずる男ぢやない」と、只管感に入つて居られたが、果せる哉伯の豫言は適中した。現内閣の花形役者と謳はれ藩閥系統中唯一の政治家として重きを儕輩の間に爲すに至つた。思ふに後藤伯は黄泉で此事を傳へ聞きて満足の微笑を洩して居らるる事であらう。

▲裁断流るゝが如き不性者

覇氣横溢、時流に超然として常に勝を千里の外に争ふの點に於ては兩者共に揆を同じうしてゐるが、個々の性格に至つては自ら異つて居る。兩後藤共、遣口の派手な政治家であるが、新平君は象二郎伯の如く大膽不敵でない。其代りに素敵な勉強家である。恐らく遞信大臣として今日まで新平君ほど天下を馳騁した者はあるまい。朝に東北の雲を攀ち、夕に關西の山を超ゆるといつた調子で、巡遊巡視に寧日なき有様である。精力の絶倫なる、事務的才能の豊富なる、逆も常人の企及し能はざる

所が、即ち新平君の特長であらう。其處に行くと故象二郎伯は實に不性極まつた人であつた。机の上には山なす調査書類が堆く積まれてゐるが、一寸一瞥を與へたのみで取つて見やうともしない。そして秘書官たる吾輩に向つて「是れは如何だ」と訊ねる、吾輩が「一々應答すると」ウン、夫れはよからう」ウン、夫れは不可ん」の一言でキチンと定まつて仕舞ふ、而も仕事の捗の行く事は一瀉千里で裁断流るゝが如しであつた。

▲二條城中の壯漢

新平君は能く人に過去の事蹟などを物語する。此頃は「處世訓」と言ふ書物を出版したり、追つては脚本までも作らせるとの事である。相馬事件の回顧談などは度々聞かされる、實に才人の本質を能く表して居る。故象二郎伯は之と全く違ふ。自分が行つた事などは一言たりとも人に話した事がない。不言實行と言つた風があつた。唯一片火の如き「果斷」と云ふ大精神で何事にも當つて居た。此點に於て新平

君は故伯と如何であらう歟。故伯は一度可矣と確信した事は如何なる毀譽褒貶に會つても儼然として斷行して仕舞ふ。此時に於て眼中唯一個の正義の念あるのみ、吾にして疚しからずんば天下を敵とするも意とせざるの概があつた。曾て二條城中に於て、綺羅星の如く列んだ幕臣の眞つ只中に平然と端坐して、將軍慶喜公の面前に於て『今日の場合、大政は陛下に返還されて然るべきもの也』と喝破して、並み居る幕臣共の荒肝を取挫いだなどは、故象二郎伯の膽勇を以てせずんば能はざる所である。

▲象二郎伯をして生きしめば

大同團結を呼號して天下を遊説し、終に政界を風靡して終つて、閥族の膽を寒からしめた天晴の大器量は、今猶政黨者流の歎賞措く能はざる所である。晩年に及んでは之れも遞相となつて空しく聲を収めたが、若し伯をして猶今日に生きしめて總理の器に任じ、風雲の馳驅を許さしむるならば、もう一層思切つた仕事が出来たであらう。

あらう。或は寧ろ非常な高壓手段に出で、大果斷を行ひ、以て群小政客を戰慄せしめたかも知れない。今日の如き惰氣満々到底度す可からざる時代に、若い時代の氣満々たる象二郎伯の如き大人物を復活せしめて、思ふ存分活動の餘地を與へ、藩閥萬能の政府を打潰さしめたならば、如何に痛烈を極むるであらう歟。小人と凡人とで造上げた今時の政治家の現状を見るに及んで、何人か故象二郎伯の如き眞個の偉人の出現を望まぬ者があらう。

▲獨り新平ある耳

元來今時の政治家は畢丸が小さ過ぎる。自ら國務大臣の位置を占めて居りながら、國家や國民は如何でもいゝ、自分さへ安全であれば以て安んずるに足る位の考へで國運の樞機に參じてゐる。怪しからぬ話である。吾輩はソんな小ぼけな人間は畢丸が小さいのに起因するのであるから、宜しく畢丸を切斷すべしとの意見を有して居る者であるが、顧みて今の内閣諸公如何と見るに、一人として國務大臣の器あ

る者はない。皆片々たる小才子、小役人、大臣は恐か次官にも當らぬ俗吏ばかりで、先づ局長位が適當な所であらう。小松原の英太郎であるとか、平田の東助であるとか、小村の壽太郎であるとか到底御話にならぬ徒輩計りである。外務大臣小村君などは我輩も翻譯局で一處に居たが、世間の人が買被つて居る程の男ではない。中には後藤新平君以上だと云ふ人もあるが、見當違ひの甚だしきものである。其處に行くくと新平君は現内閣に置いて黜くも惜しい程の腕前である。其の人の意表に出づる遣口は往々にして世間の罵評を買ふが、修養して行けばもつと偉くなるに相違ない。閣員中嶄然頭角を現はして居るのは獨り我が新平君在るのみ。

▲戦亂時代の風雲兒

明治年間に於て眞の大人物としては西郷南洲があつたと聞いて居るが、我輩の接した偉人で最も感化を及ぼされたのは故象二郎伯である。大風呂敷を擴げて雄壯な議論をする人は幾らもあるが、其の大議論大抱負を促々潑地に實行し得る者は眞の

偉人たるに背かない。故象二郎伯は高論放談四筵を驚かすと云つた風であつたが、一方に於ては直情徑行、したい放題の事を決然として斷行した。嗣子猛太郎伯は聊か乃父の面影を傳へて居るとの事であるが、現内閣に其人を求むれば、一新平君の在るあり、一寸其の衝天の意氣天下を壓倒せんと試みるあたりが似通つてゐる、唯夫れ故象二郎伯は維新戦亂の風雲が生じた巨人であつて、新平君は現代式の才氣で押通さうといふ智的政治家である。嗚呼南洲以後の隨一人——吾輩は遙かに往時を回想して追慕の情に堪えない。

余が接近したる元老大臣諸公の 人物いろく

衆議院書記官長 林田龜太郎

▲精力絶倫なりし故伊藤公

私が今日まで元老や大臣の人々に接して感じた事はいくらもある。其中でも、故伊藤公が精力の絶倫であつたと言ふ事は、私の最も深く感じたものゝ一つである。私が伊藤公に始めて會つたのは、丁度憲法制定前の事であつた。が、あの常に多忙な身であり乍ら、毎月の外國雜誌に、悉く眼を通して、自分の材料になるやうなものば、一々深く記憶に止めて居られたには驚いてしまつた。例へば、何月発行の『ナインチャンス、センチュリー』に載つて居る外務大臣を政黨の外に置くと言ふ議論に對して、一體君は如何いふ意見を持つて居るかなど、突然に訊かれる事が往々あつ

た。恁う言ふ風に公は各種の雜誌に目を通して居るので、公を訪ねる時には、名ある外國雜誌に現はれて居る、重要な記事に就いて心得て居ないと少からず面食ふ事があつた。

▲ヒットに比すへき伊藤公の心事

伊藤公は一體讀書家であつた。公が韓國統監の任に在つた時などは、かの有名な埃及の學者ロードクローマーの經驗談などは好んで愛讀して居た。と言ふのは自分の任務を全ふせんが爲で驚く可き根氣を以て讀書されたものである。全く私等のやうな年下のものから見ると、よくあれ程多忙な中で讀書が出来たものだと思はざるを得ない。世間では稍もすると公を指して風流韻事を弄する底の讀書家の如く言ふ人もあるが、それは全く公を知らない人の言ひ草である。全く伊藤公の讀書は自分の任務を果さんが爲めの、忠實なる熱心から出たのである。私は此點に於て公を尊敬するに躊躇しないのである。

又、公が金銭に淡泊であつた事は、既に世人の知る所で、恰も英國の大政治家ピットに比す可きものがある。ピットは四十萬圓の負債を残して死んだと言ふが、彼自身は少しも其負債に氣が附かなかつた位で、死後國庫から其負債を償却したと言ふ事である。我伊藤公にも亦負債があれば、當然國庫の負擔として償却しても差支ないと言はざるを得ない。

▲山縣公に深く印象を與へたる私の顔

私は平生餘り權門に出入する事を好まない。餘程な用事でもなければ、元老や大臣を訪ねると言ふ事がない。山縣公が總理大臣をして居つた頃は、よく私の顔を見るとゾツとすると言つて笑はれた事がある。何も私を厭ふて爾う言ふのではない、私が直接に訪ねる時はきつと何か容易ならぬ事が起つた場合なので、遂に山縣公の頭に私の顔が不安の印象として刻まれて居たからである。其後もよく山縣公は此事を自ら私に語つて笑はれた事が屢々あつた。

▲門前拂を食はせた井上侯

私が井上侯に會つた事に就いて茲に面白い話が残つて居る。井上侯が大藏大臣をして居た時である。私は或重大な用務を帯びて井上侯を訪ねた。處が侯は私に門前拂を喰はした。其處で私は餘儀なく其用務の内容を書いて執事に渡し、惶惶歸宅して直ちに辭職すると言つて騒ぎ出した。すると之を聞いた時の内閣書記官長の鮫島と祕書官長の早川千吉郎の二君が仲裁に入り、井上侯も慌て、私のところへやつて來て事の落着を告げた事などもあつた。爾うして此時始めて私は井上侯に會つたのである。

▲反對する陸奥伯と賛成する井上子

私が今日まで世話になつた人の中で、忘れる事の出来ないのは子爵井上毅氏である。井上子と陸奥伯との性格は實に面白い對照であつた。井上子は、何か調査物を命せられた時に、報告書や意見書を持つて行くと大變喜ぶ、既に其事はよく自分で知

つて居乍ら、初めてそれを見たやうに喜びのである。處が陸奥伯はまるで反對である。フン、こんなつまらない者かと言つたやうな顔つきで見ると、爾うして、反對の議論を擔ぎ出して打ち毀さうとする性格であつた。處が、其場で意見書や報告書を讀んで喜んで居るにも關はらず、井上子はそれに賛成しない事が往々あつた。陸奥伯の方は是と反對で、ケナして置き乍ら、反て賛成して居る事が屢々あつた。爰に陸奥伯の性格を顯す面白い話がある。

▲強情を張り通す陸奥伯

丁度それは條約改正の時であつた。土地所有權問題に對して陸奥伯から意見詢問があつたので、私は意見書を持つて行つたのである。すると、陸奥伯は例の調子で其意見書を見て居乍ら、盛んに反駁を加へた。そして言ふのには、君も最う少し學問もあり、智慧もあると思つたのに、あんなつまらぬものを持つて來るやうでは駄目だ、最う一日緩くり考へるが宜いと恚う言つて脅された。私は癪に障つて耐らな

かつたが、相手は大臣まア致方がないと思つて、更らに調査の上、再び同一の主張を以て論難舌戦した。すると、前日同様に徹頭徹尾反駁を續けて、最う一日考へて來いと言ふ。其處で三度び同じ意見を主張したら又考へて來いと言ふ。いくら何んでも我慢がしきれなくなつたので、私は喧嘩腰の大議論を始め出した。爾うして、いくら考へても同じ事だから、伯自分で考へ直しなさいと言ひ張つて、到頭其日はどちらも折れずに別れてしまつた。其翌日、私は内田祕書官長に會つたので、陸奥伯程譯の分らない人はないと言つて其一什始終を話した。すると、内田書記官長は大變笑つて言ふには、大臣も君と同説だよ。初めの主張を飽くまで貫き透すだけの見識は、今の學校出には似合はないと言つて褒めて居たと言ふのである。此一事はよく陸奥伯の性格を遺憾なく顯して居るものではないか。

豪傑には何れも可愛い所がある

早川 鐵冶

▲東洋豪傑は陰險で面白くない

吾輩は外交官をして居つたが爲めに、幸にして多くの英雄豪傑に接するを得た。所が、東洋の英雄豪傑には陰險な所があつて面白くない。朝鮮の大院君でも、支那の李鴻章でも、打ち解け難い険しい所があつた。けれども、西洋のビスマルクでも、ブレーンでも、吾輩は彼等の生前に於て會つたことがあるが、何時か露々として一種云ふに云はれぬ可愛い所がある。

▲ビスマルク犬を使嫉す

ビスマルクが彼の政敵たるビーコンスヒールドを、何とかして困らして遣らうと考へたがあつた。智略一代を壓する彼の事であるから定めし名案奇策を運らした

事であらうと思ふとさうでない。日本にすれば宛で悪太郎の仕事だ。彼はビ氏が訪ねて来るのを待受けて、獅子の如く猛しい彼の愛犬を嗾かけた。是には流石のビーコンスヒールドも甚だ以て閉口したと云ふのであるが、此の如く西洋の豪傑には其エライ裡面に於て誠に子供らしい可愛い所がある。

▲剃刀大臣——狸親爺

日本人にもエライ人で可愛い所がある人もある。吾輩は、後藤象次郎、大隈重信、陸奥宗光さんなどの秘書官をしたことがあるから、是等の人の事は能く知つて居る。世間では陸奥を剃刀大臣と稱し、後藤を狸親爺、大隈を狸などと綽名して居るけれども、其剃刀大臣の家庭に斯う云ふ愛嬌話がある。

陸奥さんが一日娘を呼び付けて、女と云ふ者は行儀を善くせねばならぬものだと思ふ行儀作法の事を説法して居つた。所が先生禪が少し露出して居るのに氣が付かないで眞面目腐つて頻に娘を説いて居る。娘はくすくす笑つて仕様がな。丁度

妙齡になつて居るのだ。何が可笑しいかと糺しても唯笑つて居る。そこへ脇に奥さんが居て「アナタそんな物を出してゐてはいけません」と注意したので、先生、是れはどうも怪しからぬと云つて慌てゝ隠したさうである。社會の表面に立つては、觸れば切れる陸奥さんでも其裏面の家庭には何處か斯う云ふ間拔けた所に掬す可き可愛さがあつた。

▲狸親爺の空惚け

後藤さんは狸親爺と云はれた丈けに、ナカノ／＼堅い人であつた。所が或日富貴樓の内儀など云ふ連中を大勢集めて花を引いて居た。すると生憎岩崎彌之助男が来た。ソラ隠せと手早く隠して一同空呆けて居た。男が今日は色々の奴が来て居ますねと云ふと、今日はどうも悪い者が来て悪い事を勧めていけません。困つたものだと、ニタ／＼笑ひ乍ら外方を向いて居たとか、あの堅い人にしても時としては斯う云ふ呆けた風をしたものであつた。

▲狸の大隈は失敗して何時も樂天

それから狸の大隈なんと云ふ先生は、エライ事はエライに相違ないが又何所かに抜けた所がある。先生は何時も樂天である。今度は見居れ屹度成功するなど云ふが仰せ畏つて見て居ると屹度失敗だ。明治三十一年の事である。内閣が瓦解した。其間に於て先生は衆議院の議長を此方へ取つて見せると云つて、河野廣中などを、候補に擬した様であつたが、さて實際となつて見ると林有造に奪られて仕舞つた。此時などの伯の氣焰は素晴らしいもので、十中の九分九厘まで伯のものである様な口振りであつたが、開けて見ると例に依て失敗である。然し失敗しても先生矢張り樂天である。あれ丈け伶俐巧の人であれ丈けエライ人であつて、どうして世の中の事が分らぬかと思ふて度々可笑しい事がある。

▲青年は最も天真爛漫ならざる可からず

是れから見ると英雄豪傑でも可愛い所のないのは駄目だ。否寧ろ可愛い所のない

のは眞の英雄豪傑でないかも知れぬ。今の青年は徒に氣取つて天真爛漫の美風が更
にない。斯う云つたら自己の値打が下らうかとか、斯う云ふ風をしたら先輩の氣に
入るまいかなどと、始終よくして居るから悉く意氣が銷沈して仕舞ふのである。
東西の英雄豪傑にして此の如しとせば、淡白を尊ぶ青年には、是非可愛い所がなけ
ればならぬ。

大木喬任伯の十年祭に際して故人 の面影を追懷す

伯爵 大隈重信

▲宛然長袖者流の風あり

大木は我輩よりも六つか七つ年上であつたが、親戚の間柄なので早くから接觸し
て居つた。我輩が弘道館(佐賀)の一年級に入つた時に、大木はもう卒業前であつ

たが、卒業後も猶研究の爲に一年餘も止まつて勉強して居た。それで我輩と大木と
が弘道館で一緒に居た間は、凡そ一年半位であつたやうに覺えて居る。其間よく
我輩の幼少を保護して呉れた。

さて其當時の大木はどう云ふ人であつたかと言ふと、流石に他と撰を異にして居
た。單に言行のみならず、服装まで藩士一般の風習と違つて居た。第一藩の書生は
着物など所謂『衣到肝袖到腕』と云ふ風で、頗る武張つたものであつたが、大
木はどうかと言ふと、絹の裏地のついた長い着物などを着流して居る。袴も一般の
書生は膝位までの物を穿いて、肩で風を切つて歩いて居るのに、大木は爪先まで届
くやうな長袴をそろく引き摺つて歩いて居た。それから藩の書生が弘道館で勉
強するのには、座蒲團など敷いてやる者は一人もなかつたが、大木は自宅から絹の座
蒲團など持つて来て、平氣で使用して居た。それは或は自宅に絹蒲團しかなかつた
のかも知れないが、兎に角そんな風で、他が肩を聳かして往來狭しと濶歩して居る

のに、大木は滅多に人の先へも立たぬと云ふ風だ。溫柔で、脆弱で、如何にも俗物らしく見えた。

然し、其處が所謂偉人の偉大なる所であつたかも知れぬ。何故と言ふと、イザとなると、なか／＼溫柔でも脆弱でもなく、寧ろ喧嘩の時などは巧みに敵手を挫いて閉口させると云ふやうな勇氣もあれば腕力もあつたのである。それに又辯舌も爽かで、且つ智略にも長じて居たから、巧みに敵手を言ひ丸めて屈服させる事が度々あつた。要するに好んで人の意表に出るやうな事をやつて居たやうだ。

▲行住坐臥書を放たす

處が、維新後に至つて、大木の性格が非常に變つて來た。誰でも變らない者はないが、大木程變つた者も少い。それは年を取つた爲でもあらうし、又世路の曲折を経て來たからでもあらうが、元來が大木は智慮に富んで居るのに、其上餘り讀書をしたので、幾らか考へ過すやうになつた。だから事をやるに注意周到、寧ろ決する

の遲きを思はしめる事があつたのである。元來非常に讀書する者は、實行の點に於いて迂になるものである。それは即ち思索家になるからである。大木にも確かにさう云ふ所があつた。大木は實際讀書家であつた。若い時から晩年に至るまで、其癖を止めなかつた。長崎で我輩と一緒に初めて英語の憲法を讀んで居た時など、行住坐臥其本を離さず、朱で書き入れて眞赤になつた上を、又大好きの茶と煙草で眞黒くなして居た。其廟堂に立つに至つてからも、夜は大抵一時二時まで起きて書見して居た。さう云ふ人だから、サツと言つてサツと立つやうな事はしない。非常に慎重な態度を取る。そして自分の名譽心や、虛榮心で國家の大事を尙もするやうな事はなかつた。随つて事を行ふにも、強いて自分の力を表面に現はさうとしない。例巧だから大樹の蔭に依つてやる。例へば岩倉とか、木戸とか云ふ人は、さう云ふ場合の對照者であつた。さう云ふ點に於いて彼は政略家であつた。又實際其方が效力も多かつたらうと思ふ。

▲大木屢々大隈を駁る

其處へ行くと、我輩は學問もなければ智慧も乏しい。のみならず氣象が何時も黙つては居られないと云ふ性分で、随つて事を行ふ流儀も違つて居た。我輩は事にぶツ突かると、電光石火、何でも其處でやツ付ける、グン／＼先へ進むと云ふ風であつた。さう云ふ流儀の相違から、段々政治上の意見も合はないやうになつた。つまり我輩のやり過す所と、大木のやり足らぬ所とが合はなかつたのである。然し、大木も人のやる事を見てなかく黙つて居る男でない。殊に我輩のやり過す點に向つて、よく忠告もして呉れた。我輩も亦大木のやり鈍る點に向つて逆振りを食はせた。そんな風で、我輩は大木と口論して、大木から駁られた事も度々あつた。

▲大木と井上の軋轢

大木は後年文部大臣になつた程で、學問教育に重きを置いて居た。維新で封建の制度は潰れ、學校も多く閉されたが然し國民の教育は片時も忽せにする事は出来な

い。大権の下に天下の人心を統轄して行くには、どうしても新教育の必要がある。それには先づ西洋の文明を日本に輸入するがよい。西洋の教育制度を日本に採用するがよい。何處までも彼の長を採り、此の短を補ふて行く事を日本の國是としなければならぬ。外の事は儉約しても、後廻しにしても、先づ教育を盛んにしなければならぬ。大木は斯う云ふ信念を持つて、文部卿の位地に就くや、直ちに實行に取りかゝつた。處が時の大藏卿井上が頑として聞かない。そんな事には金を出せないと云ふ。井上はなかく裁斷の鋭い人であるが、大木は智あつて遅しである。實行的方面では、なかく井上の敵ではない、井上は無理窟を言つても、仕事の上では優れた手腕を持つて居つた。殊に長州と云ふ後楯もある事だ。お前の云ふやうな大規模の改正にさう金を使はれては困る。一文も出せないと云ふ。是は然し井上も我儘であつたのだ。大木も是には餘程弱つた。丸で糧道を断られたやうなものだ。そこで大木は平生我輩と仲が悪いにも拘らず、援兵をやつて呉れと言つて來た。聞いて

見ると大木の不平も尤もである。そこで我輩は参議として内閣に居たので、井上方へ命令を出した。其時分はまだ各省共内閣の支配を受けて居たのである。そこで井上は吾輩の命令に不服を抱いて乃公が罷めたら財政に困るだらうと云ふ顔附で終に辭職したので、宜しいそれでは吾輩が大藏もやると言つて實行したと云ふ次第であつた。兎に角教育上に於ける大木の功績は大なるものであつた。日本の今日ある又大に大木の方に依ると言はねばならぬ。

外に在ては獅子の如く鬪ひ内に在ては猫の如く親める星亨氏の人格

利光鶴松

▲一人の知己を得れば天下を取る事も出来る
いくら馬鹿者の多い世の中でも時には識者がある。赤誠を以て吐露する自分の主

義主張に對して多くの敵を有つのは一向差支はない。又、必ず敵が出来る。併し敵ばかりでも困る。味方を作らなくてはならない。千人の敵があつても十人の味方を得れば以て満足す可きである。相信する朋友知己がなくては、如何に其人に抜群の才があつても、それを發揮する事は出来ない。一度有力な知己を得れば、天下をとる事も強ち出来ないとは言へない。太閤秀吉は今猶古今の英傑として敬慕されて居る。併し、如何に秀吉が天分の才能に富んで居たにしても、織田信長と言ふ知己に遇はなかつたならば、果して天下を掌握し得たや否や甚だ疑問である。信長が一目秀吉を見て、この小僧見込のある、面白い奴だと思つて、天下に紹介して呉れたから、秀吉も十分其驥足を伸す事が出来たのである。天分の才能を働かす事が出来たのである。如何なる偉人と雖も一人の知己もなくては到底社會に立つて働けるものではない。

▲家庭に於ける小人の痴態

今日、多少世に其名を顯して居る人達には、必ず知己恩人がある。先輩がある。由來、人間は社交的の動物で、相寄り相扶けて其生存を全ふする。先輩が後輩を引立てるのも、後輩が先輩を敬つて働くのも皆爾うである。夫婦關係の如きは、社交的動物の性質を最も明に證據立てたものである。夫は廣く外に出て交り、妻は内に在て夫の勞を慰める、即ち相寄り相扶けるのである。處が、我國の家庭には往々此相互扶助の關係を無視する小人が多い。外に出でて失錯があれば、其不平を抱いて家に歸り、罪もなき妻子に當り散らして其鬱を晴す。實に噴飯の極である。我輩は、かゝる小人を見る毎に、そいろに一世の怪傑故星亨氏を想ひ起さざるを得ない。

▲阪上田村磨に比すへき星氏の日常生活

星氏と我輩とは無二の親友であつた。世間からはいろく非難のあつた人であるが、あれ程の勢力家であるから多少の敵のあるのは免れない。星氏の眼中には、何等の權威も、階級もない。同仁一視、平等無差別であつた。然かも一度其風丰を見れば、古今の英傑に見る一種の威力を備へて、自ら人をして推服せしめる。如何に政黨問題で騷擾を極めて居る時でも、星氏の顔が其處に顯れれば、靜肅に歸つて、種種善後策が講せらるゝと云ふ有様であつた。若し夫れ星氏が外に在つて多くの強敵と相對し、火花を散らして舌戦する武者振は、一世の豪傑が陣頭に馬を進めて最後の勝敗を決するが如き概があつた。然かも一度戦を終へて靜に馬を家庭の門に下れば、恰も平和の主人公として其日の出來事を全く忘れた如き觀がある。當時、三四歳の長子光君が父の歸りを玄關に迎えると、満面に笑を浮べて其頭を撫でつゝ書齋に入る有様は、流石に度量の大を示して居る。一度怒れば三軍の士卒もおそれ、一度笑へば兒童も其膝になづくと言ふ彼の阪上田村磨の面影を想ひ起さざるを得ない。名將の價値は全く愛に存するのである。義に厚きものは情に脆い、星氏が母によく仕ふる事は到底常人の及ぶ所ではなかつた。然かも其一身には極めて質素で、洋服の如きも三四年同じものを用ゐて居た。猶且、禁酒、禁色、家庭にあつては深

く讀書に耽り、戦場に用ゆる知識の剣を只管磨き磨き居た。實に星氏は、徹頭徹尾公生涯の爲めに其一身を捧げたのである。外の戦に強かつた星氏は、家庭にあつては一個温き平和の主人であつた。

▲偉人と凡人の破れ目

新聞雑誌記者の態度も亦かくあらねばならぬのである。一度筆を執つた以上は如何なる強敵とも戦ふ覺悟がなくてはならないが個人としては極めて平和を貴ばなくてはならない。世間の人は、記者を非常に怖れるがそれは畢竟記者の天職を知らないからである。我輩は自ら進んで記者を周旋した事もある。現に東京市の助役をして居る田川大吉郎君は其以前都新聞の主筆であつた。當時、一ヶ月餘に亘つて我輩を攻撃し、其筆鋒當る可らざる勢であつた。然かも其論鋒が中々面白い、道理に叶つて居る。そこで我輩は自ら田川君を訪問して、君だけの頭腦があれば儘かだから一つ東京市の助役になつては何うだと薦めて、我輩の關係ある市會議員などを説いて

助役に推薦したのである。天晴なものは敵と雖提携する。不徳なものは味方と雖も戦を交ゆる。これ男子の本分ではないか。苟も、これから世に出て働かうと言ふ青年は、事を大きくやればやる程、多くの敵のある事を忘れてはならぬ。四面に敵を受けて更に臆せず、大膽に對戦する事星氏の如く、家庭に入つては淡泊温情なる事星氏の如くあらねばならぬ。偉人と凡人との岐れ目は一に懸つて此修養にあるのである。

星亨を拘引したる時と握手したる時の感想

前、島司 倉山昌親

▲新潟市の自由黨演説會

明治十六年の末つ方、彼の天下の耳目を聳動した、河野廣中等の所謂『福島事件』

の大疑獄が終を告げた。當時、福島警察署長であつた予は、親しく本事件に關與して居たが、次で翌年の二月、新潟縣の保安課に轉じ、其の主席を拜命したのである。予が茲に語らんとする星亨事件は同年十月に起つた出來事である。宛も、當時關東及東北に於ける自由黨員の巢窟と目せられた新潟市に於て、北陸七道懇親會なるものが、自由黨派の重立つた人々に依つて開催せられた。

會場は新潟市で名は忘れたが有名な大きな禪刹で、各縣から懇親會に出席する者又は演說會の景況を見んと欲する者、無慮三千餘名と云ふ勢であつた。自由黨の名士山際七次君が演說會の司會者であつた。其折柄、予は此の演說會に臨監して辯士の演說に注意す可く向つたのである。當年の星亨と來ては素晴らしい勢力のあつた者だ。星は自由黨の總理である、物を言ふに座敷を隔て、對話せねばならぬと云ふ有様、多くの群集は今か今かと星の演說を待ち構へて居る。予は縣廳の本部から警部、警部補及巡查三十名を率ゐ更に新潟警察署長の緊尾紋治君の助勢を乞ふて、演

說會場に乗込んだ。

▲『ロシアの政府を取つた時は』

星の演題は確と記憶して居らぬが、『法律の原解』(?)と云ふのであつたと思ふ。四番目に立つて星は演說を始めた。予等も、星が豈夫激烈な言を吐くまいと信じて居たが、口を開いて語る所を聞いて見ると、論旨が次第に過激になつて來る。論點は何でも、日本を主とし、露西亞、獨逸、佛蘭西を客とした議論であつた。中世歐洲と徳川時代との比較論、遞信農商民業の事などを辯じ來つて、中途に『若し我が政府を取つたならば、斯の如く民業を害する事は勿論廢する』と叫んだ。其上に我國の法律規定や政治を徹頭徹尾詳議して了つた。茲に於て、予は群集の中に屹立して『待て！』と聲を掛けた。星は制止を聞かずに、猶も言を續けて『ロシアの政府を取つた時は』と附け加へた。予は再び『待て！』と叫んだ、スルと星は何と思つたか遂に黙した。

司會者の山際を呼んで、星は政社法と政治とを誹議したから輕罪犯に相當すると申渡すと、群集は一時に激昂したと見えて急に動搖し始めた。

▲星を引致すべき理由に窮す

予は事件の顛末を直ちに本部に報ずると共に、井上警部長外二十四名に依頼して即座に星を引致せんことを提言した。併し星は正六位の位階を持つて居るので迂ッかり手は出せぬ。先づ縣令に話さなければならぬと多數は主張する。予は斷乎として引致説を固張したが、多數決で終に縣令に話を持ちかけることに決した。予等三人の警部は午後五時頃縣應に歸り、縣令永山盛照氏に相談すると、縣令が「倉山は徹頭徹尾星を輕罪犯に問ふ積か」と聞くから、「予は星に對して何等の恩怨も何もないが、刑法の執行官であるから、言論が不穩に渡つたといふ廉で引致したい。」と述べた。すると縣令は「星も天下の名物男であるから、二年間行政に關する政談演説を中止することにしよう」と云ひながら、長官の捺印をして即座に自分に渡された。

處が、歸つて法律の條文を調べて見ると、政法誹毀罪なるものは無いので非常に困つた。翌朝になる迄見付からないので手の付け様がない。

▲星は行方不明となつた

警察に行つて見ると、丹羽警部が「飛んでもない事を君はやつたね」と云ふ、「何故か」と訊くと「星の申立には命令を拒んだ覺はないと云ふ」と告げて、之も困つた様子である。そこで刑事と警部と署長と總掛りで、徹夜で取調に掛つて居る最中、縣應から呼出しが來た。飛んで行つて見ると、永山縣令が「星の引致は法律の第何條に依つたのであるか」と厳しく訊かれる。處が幸にも、河村良三郎と云つて至極記憶の強い警部が居て「政治の誹毀罪は侮辱罪に相當する、即ち當局者を誹毀した事になるから官吏侮辱罪で手續を遣り直したら良い」と云ひ出したので、直に手續を濟ませると共に、星の旅館の木屋に出張して見ると、星は既に旅館を立つた後で、何處に去つたか行方不明である。サア星は居ない、何處と云つて雲を攫むや

うな有様であるから、當方は七頭八倒だ。かゝる場合の出奔に對して刑法は處罰することが出来る。今や自由黨の意志は絶対に政府に對して、反對するものと認め得るのである。そこで裁判所長の中山判事と眞幸檢事正と井上警部と予とは、祕密會議を開いて善後策を講じて見た。予は飽までも刑法上の犯罪であることを主張したが、中山判事は躊躇の餘り、進んで星を檢舉する丈の勇氣がなかつた。漸く眞幸檢事正の發議で引致に決したやうな次第である。

本事件は豫審に附せずに直ちに公判に移り得る丈の用意ある調査を要するので、頻々と星の行先を、電報で問合せ見たが、依然として行衛が分明しない。従つて星を逮捕に向ふ勇氣ある者もなかつた。茲に於て予は奮然として起つたのである。起つは起つたものゝ、何處を捜せば見付かるのか、仲々容易でない、當時の警察官には『形なきを見、聲なきを聞く』と云ふ言があつた。予は星が何處に潜伏して居やうとも、天地間に居るに過ぎないと決心して、愈々助勢二名を引連れて新潟の地

を出でんとしたのである。

▲後家の家から星を捕縛す

昨夜十二時過ぎまで旅館に居た星が、忽然として影を沒したのであるから、さう遠くへ行つてる筈はない。此處彼處と地理を按じて居る中に、予は我ながらハタと膝を打つたのである。星は信濃川を下つて新田に向つたに相違ない。斯く思付くと共に、凡ての劃策は電光の如く予が胸に閃いた。

同行三人は三人曳の俥で新發田に駈付けた。愴惶として同所の警察を訪ねると並川署長は『ソんな事はない』と云張る。予は猶固く信じて動かぬので、自ら正服を脱いで單身探偵に出掛けた。附近の俥屋の老爺を呼んで、之に五圓の金を與へて置いて、『今朝か昨晚かに、四五人連の客が當處に入込まなかつたか』と聞くと、『知らない』と云ふ。『それでは、此の新發田に、或る後家さんで、自由黨員と深く結託して居る者が三四人居るが、お前は之から其處に行つて探しあて、呉れ』と頼んだ。

暫くすると、俵夫は歸つて来て『四五人連の人が見えました』と報ずる。「名前は」と聞くと『判らない』と云ふ、『それでは、自分に能く似た顔で、肥つて髯の無い蒼白い顔の星と云ふ男が居る筈であるから下女に聞き糺してくれ』と、更に五圓を與へてやつた。聽て俵夫は飛んで歸り『確かに星と云ふ人です』と告げた、金子と云ふ後家さんの家である、予は直ちに正服を着けて星を逮捕す可く、金子家に向つた。

▲非常の場合に處する星の用意

ドカんと予が踏込んだ時は、星が宛も二階の八疊で飯を喰はうとして居た時であつた。山際、鈴木、富田の三名士も傍に附いて居る。予は星に向つて例の官吏侮辱罪の令状を示すと、星は頗る落付拂つた態度で、『官吏を侮辱した覺はない』と答へた。『此の令状に抵抗するか』と言ふと、流石に星だけあつて、キツパリと承認してくれた。予は三名の警官を後に殘して歸らうとすると、星が一時間の猶豫を頼む。星が一時間中に如何なる事を爲さんとするか、萬事を手帳に認めて置けと調査

に命じて歸つた。然るに、夫れは各處に、兇變を報ずる電報であつたのである。自宅へは『何處からか二萬圓の金が来る』と云ふ事と『馬の處分』の事であつた。誰誰であつたか記憶せぬが貴顯三名へ宛てた電報には『新潟縣に於て官吏侮辱罪で拘引せられた』といふ意味のものであつた。拘引が午後五時、翌朝の拂曉には新潟に護送する事となつた。

▲訊問五日間星遂に恐入る

検事が特に予に對して、星の事件は豫審の必要のない迄、調べて呉れと頼んで居るので、予は星の全部を背負つて立つ可く餘儀なくされた。五日間といふものは訊問し通しである。而も五日間とも星の身装が變つたのには、我ながら星の注意深い用意に驚かされた。一等巡査の稻田と云ふのを書記として訊問を開始した。

予『お前は外國語に通じて居るか』

星『佛蘭西語には通じて居るが、獨逸語は知らない』

星「露西亞は國體の狀態を知らぬ位であるから國語は無論分らない」と殊に力を籠めて返答した。

五日目には露骨に問ふて見た。

予「お前は、自分が政府を取つた時は、と云つたではないか」

星「イヤ露西亞の政府を取つた時は……と言つた迄だ」と逃げる。

予「既に露西亞政府と云ふ、國體を知らぬ筈はない」と突ッ込むと、何と思つたか星は沈黙熟考すること五分間計であつたが、頓て、

星「恐入りました。全く日本を主として露西亞、佛蘭西、獨逸を客として論じたのです」と自白した。

予「恐入つたか」と突込むと、

星「警察官が、斯の如く認められた以上は致方がない訂正して呉れ」と頼む。

之で星の訊問は濟んだ。一件書類を裁判所に送ると共に、彼の位記を剝奪し代言

職を剝奪し、更に罰金二百圓と十ヶ月の刑に處することに決したのである。

▲監獄の中で星と窓外の邂逅

其後、予は間も無く警察署長となつた。

ある時、典獄の福島武二君と共に、四人の仕事を巡視して居ると、意外にも多くの罪囚の中から平身低頭して土下座した者があつた。見れば星である。「私は十一月には愈々刑期が満ちて出獄することになりました」と語つた時には予も感涙滂沱たるものがあつた。星の仕事は、巻紙の粗末なのを巻くのであつた。「嘸御難儀だらうが、身體丈は大切にせられよ」と呉れくも告げて別れた。家に歸ると、母に相談して、牛の飼養を四斤丈け造つて鐵板の籠に入れて差入れた。處が既決囚であるからと云ふので突き戻された時には我ながら残念であつた。星が愈々刑期が満ちて出獄する際は、自由黨の出迎の旗が幾流となく門外風に靡いて居た。星は出獄後暫く足を堀端町の個人旅館に留めて居たので、正服の儘訪問すると、最早十五分前